

地域とスポーツ

—育てる、繋がる、伝える—

季刊誌 第10号

—2023年冬号—

一般社団法人

子ども未来・スポーツ社会文化研究所



はじめに

地域とスポーツ ー育てる、繋がる、伝えるー

子ども未来・スポーツ社会文化研究所「季刊誌第10号：2023年冬号」をお届けします。

今、学校を中心としたスポーツの活動が、地域のクラブに移行しつつあります。そこでは何が起きているのでしょうか。また、そのことの社会的意味は何でしょうか。さらに、メディアは、スポーツを地域に広げるために歴史的にどのように報道してきたのでしょうか。それらを探るために、今期（第28～30回）のセミナーでは、地域のスポーツクラブで子どもたちをどのように「育てる」のか、中学校運動部の地域移行で公共圏としての地域クラブで「繋がる」意味はあるのか、サッカーというスポーツが地域に浸透していくうえで、メディアがどのように「伝える」のかを考えてみました。

第28回セミナーでは、二宮 博氏（元ガンバ大阪スカウト）に「サッカープレイヤーを、見つける、育てる」と題して、お話いただきました。Jリーグで27年間にわたり「ガンバ大阪」で本田圭佑、鎌田大地、堂安律らの選手の発掘に携わり、「伝説のスカウト」と呼ばれた二宮氏に、サッカープレイヤーを育てることを語ってもらい、スポーツにおける指導、さらに、これからの教育の在り方について考えました。

第29回セミナーでは、水上博司氏（会員・日本大学文理学部体育学科教授）に「『中学校運動部の地域移行』政策から考えるスポーツクラブー公共圏と社会運動の視点からー」と題して、お話いただきました。現在、スポーツ庁が進めている「中学校運動部の地域移行」政策は、学校運動部というスポーツ組織を根底から見直す機会になっています。それは学校期の子どもたちに相応しいスポーツ組織とは、いかなる価値を有する必要があるのかを考えることです。20年間にわたって総合型地域スポーツクラブの育成を支援し、NPO活動の実践をしてこられた水上氏と「スポーツクラブ」とは何かを議論しました。

第30回セミナーでは、黒田 勇氏（理事・関西大学名誉教授）に「サッカーとメディアの100年ー日本サッカー協会100周年に寄せてー」と題して、お話いただきました。1921(大正10)年に日本蹴球協会が組織され一世紀が経過しました。1918(大正7)年1月、「日本フットボール大会」が大阪毎日新聞の主催で開催されたころから、サッカーは一般にも知られるようになり、その後半世紀近く、報道はされたものの、メディアスポーツにとって満足のいくコンテンツとなりませんでした。ただ、その転換点は60年代後半にやってきました。日本サッカーリーグの開始、欧州プロチームの来日、メキシコ五輪と、メディアはサッカーに注目します。そして、野球、相撲、ボクシングという日本の三大メディアスポーツのなかに新たなポジションを占め、その後の世界への飛躍につながります。その「飛躍」へとつながる、それ以前の長い滑走路と離陸のあたりを振り返りました。

ご一読いただき、皆さんからの忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

<目次>

●第28回オープンサマーセミナー・・・P.3～

- ◆ テーマ：サッカープレイヤーを、見つける、育てる
- ◆ 日 時：2023年9月2日（土）15時～17時
- ◆ 会 場：関西大学梅田キャンパス（Me RISE）7階 701教室
ZOOMによるオンライン
- ◆ 報 告：二宮 博氏（元ガンバ大阪スカウト）
- ◆ コメント：黒田 勇氏（理事・関西大学名誉教授）
- ◆ 司 会：杉本厚夫氏（代表・京都教育大学／関西大学名誉教授）

●第29回セミナー・・・P.13～

- ◆ テーマ：「中学校運動部の地域移行」政策から考えるスポーツクラブー 公共圏と社会運動の視点からー
- ◆ 日 時：2023年10月19日（木）20時～21時30分
- ◆ 方 法：ZOOMによるオンラインセミナー
- ◆ ナビゲーター：水上博司氏（会員・日本大学文理学部体育学科教授）
- ◆ コメンテーター：宮嶋泰子氏（会員・一般社団法人カルティベータ代表）
- ◆ ファシリテーター：杉本厚夫氏（代表・京都教育大学／関西大学名誉教授）

●第30回記念オープンセミナー・・・P.31～

- ◆ テーマ：サッカーとメディアの100年ー日本サッカー協会100周年に寄せてー
- ◆ 日 時：2023年11月30日（木）20時～21時30分
- ◆ 方 法：ZOOMによるオンラインセミナー
- ◆ ナビゲーター：黒田 勇氏（理事・関西大学名誉教授）
- ◆ コメンテーター：北川信行氏（会員・サンケイスポーツ編集委員）
- ◆ ファシリテーター：杉本厚夫氏（代表・京都教育大学／関西大学名誉教授）

《第28回オープンサマーセミナー》

「サッカープレイヤーを、見つける、育てる」

二宮 博（元ガンバ大阪スカウト）

はじめに

関西大学のサッカー部 OB で、今 J リーグで活躍している選手は、ヴィッセル神戸の前川黛也さん、ガンバ大阪の黒川圭介さん、サンフレッチェ広島の荒木隼人さんと、そうそうたるメンバーがいます。なかでも、この荒木さんはガンバ門真のジュニアユース（中学生）のチームにいたのですが、ガンバ大阪のユースに入る試験に落ちたのです。そこで、サンフレッチェ広島のユースに入り、そこから関西大学に行って、またサンフレッチェ広島に帰って、日本代表にも1回入りました。高校を卒業してプロになれなくても、大学サッカー部に4年間在籍したことで、プロのサッカー選手として活躍している選手は多数います。このようにプロのサッカー選手になる道は様々ですが、ジュニアユースの時代にその基礎が出来上がるのではないかと考えています。

自己紹介をしておきますと、私は愛媛県生まれで、中京大学卒業後、生まれ故郷で公立中学の保健体育教諭として10年間勤務していました。1994年からJリーグ、ガンバ大阪のスカウトとして多くの選手の発掘・獲得に携わってきました。日本代表の本田圭佑、宇佐美貴史、昌子源、堂安律、鎌田大地らの世界で活躍できるプレイヤーの育成にかかわった経験があります。その後は育成組織であるアカデミー本部長などを歴任し、組織の充実などに努め、『育成のガンバ大阪』という評価をいただきました。2021年定年を前にガンバ大阪を退社し、自らがスカウトした元Jリーガー、寄本晋輔氏が代表を務める（キャプテン翼の原作者である高橋陽一先生が代表を務める東京都の南葛 SC というチームの社長でもあります）ブランド品の買取や販売事業を手掛けるバリュエンスホールディングス株式会社に入社し、社長室シニアスペシャリストとしてスポーツ関連事業に携わるほか、神戸国際大学客員教授に就任し、企業でも講演活動などをしております。

このような経歴から、私は2021年2月7日に日刊スポーツに「伝説のスカウト」ということで紹介され、自分でもびっくりしています。今回、その経験から執筆した『一流の共通点—スカウトマンの私が見てきた成功を呼ぶ人の10人の人間力』という本を上梓しました。本書は思いがけず、2018年のロシアワールドカップ日本代表の西野朗監督（元ガンバ大阪監督）から推薦をしていただきました。余談ですが、驚いたことにガンバ大阪は、在籍した本田圭佑選手が4点、稲本潤一選手が2点、堂安律選手が2点、遠藤保仁選手が1点と、ワールドカップ最多の9得点のクラブになっています。

昨今、人生100年時代と言われています。サッカープレイヤーを育てることを通してスポーツにおける指導、さらにこれからの教育の在り方について一緒に考えてみたいと思

います。今でも、スカウトとしてわからないことばかりですが、1, 見つける、2, 育てる、3, 海外研修トピックスとして、これまでの経験から学んだことを正直にお伝えしたいという思いです。

1. 見つける

1) スカウトとは

スカウトする時に何を見ているかですが、若いときは身体（アスリート）ばかり見ていました。サッカー選手ですから、身長、体格、才能、体力、技術ばかりを見ていたのです。しかし、だんだんとこれだけではないなと思うようになりました。それに加えて、「頭（考え方）」と「心（意志）」です。心というのは、車でいえばエンジンだし、ピアノでいえば弦、テニスのラケットでいえばガットです。この考え方と心の強さで、プロになれるかどうかは決まってくるのではないかと思います。したがって、僕は頭、心、身体、この三つをバランスよく見ます。多くの選手を見てきましたが、いかんせん、心が弱いために引退する選手や、逆に身体は圧倒的でなくても、頭と心の2つに火がついて改善した選手もいました。この頭と心は子どもの頃に培われるものだと思います。

特にどういうところを見ているのか、優先順位を付けたら次のような順番になります。①マインド（プロ選手に必要な資質）、②技術（絶対必要なもの）、③能力（飛び抜けた武器、物事を客観的に見る力）です。元日本代表監督の岡田武史さん曰く、「本田圭佑という選手は普通の選手よりずば抜けているものはない。何がずば抜けているのかというと、考え方、人間力がとてつもなく大きい」ということを聞きました。逆に、プロサッカー選手になっても今まで見たことのないような選手と出会って途中で諦める選手が多いです。例えば、ガンバ大阪に入っただけで満足して、同じポジションの遠藤保仁（現ジュビロ磐田）選手を見て「遠藤さんには絶対に勝てません」と諦めてしまうのです。

このような資質を見分けるために心がけていること（スカウトマンとしてのポリシー）は、先入観を持たないで、人を真っ白に、真っすぐに見るということです。だから、その選手のデータはできるだけ見ません。どの選手も無限の可能性を秘めています。そういう観点でプレイを分析するようにしていました。そして、妥当性を得るために、真剣勝負のプレイを三度見て評価するようにしています。さらに、他者の意見に縛られないために、必ず一人で見ます。

スカウトをする上で、印象に残っているアドバイスをいただいたのは、亡くなられたネルソン吉村さんです。スカウト合戦したらほとんど僕が勝つのですが、僕ではなく、ガンバ大阪の名前と当時の指導者の良さ、そしてサッカーをする環境が良かったからなのです。ある時、「調子に乗ったらあかんぞ」と思いっきり叱られました。「家長や宇佐美はガンバ大阪に行かなくても、元々うまいんや。セレッソ大阪に来て一緒になんよ。一番大事なのは、こういう選手というのは、滅多に出ないから、そこまでいかない選手をどうやって発掘するかが大事だ」ということです。

例えば、播戸竜二は、月に10万円の練習生から日本代表になりましたが、そんな彼をスカウトをした私が注目されたのです。選手をスカウトするときに、ある程度の肩書きとか、成績とか実績とか社長に説明する必要があるのですが、そういうものが全くなかった播戸を、僕は兵庫県の国体選抜で見たときに、これはやれるなと思って、当時の社長に掛け合いました。結果的に彼が日本代表になったから、そのことで私は一人前のプロスカウトになることができたのだと思います。

2) プロサッカー選手への道程

プロサッカー選手になる道はひとつではありません。宇佐美貴史や堂安律のように、ガンバ大阪のジュニアユース（中学校）からユース（高校）を経て、プロのサッカー選手になることもあれば、本田圭佑（星稜高校）、鎌田大地（東山高校）、東口順昭（京都洛南高校から新潟経営大学）、林大地（履正社高校から大阪体育大学）といったように、一旦クラブから離れて、高校、大学を経てプロのサッカー選手になる場合もあります。

ガンバ大阪のスカウトする中学校1年生は基本20名（フィールドプレイヤー18名・ゴールキーパー2名）です。私は当初、高校生、大学生のスカウトをやっていました。次にそこを卒業して、小学6年生、中学3年生のスカウトをしました。良かったと思うのは小学生、中学生、高校生、大学生、全てのカテゴリーの全国大会を見たり、選手を見たり、それが今の大きな財産になっています。人がいなかったというのもありますけど、全てをさせていただいた。そうやって、最後はアカデミー組織（クラブで選手を養成する組織）の責任者として、遠隔地から優秀な選手を受け入れるために私立高校と提携し、大阪の子どももみんな寮に入るようにしました。今、寮は中学生も10名程度いて、全員で50名ぐらいになります。

前述のように、プロの選手になる夢を持っている中学生がガンバ大阪に20名入ってくるのですが、ピラミッドの型で、中学校3年生の夏から秋にかけてユース（高校生）に進むために1学年10名にしなければいけません。20名の選手に三者面談して、あなたは高校ユースに昇格します、昇格しませんと、最初に伝える係でした。学校の教員をしていましたので、そういうことをする必要があると思いました。私にとっては、1年で一番嫌なことです。親御さんと子どもは、ガンバ大阪で将来プロになりたいと賭けてきていますから。

ユースに進めませんという通達をした中で、本田圭佑、東口順昭は2人とも遅咲きだったのです。今はこういう部分で負けているけれども、きっと君たちは技術があるから大丈夫だと思いつつ、話をしながら勇気づけるようなことをしたのです。

そういう中で、鎌田大地選手は微妙なラインでした。3年間で25cmも身長が伸びたけど、3年間で3回も骨折して怪我が多かったのです。お父さんと大地くんの後で聞いたら、宮本、稲本が育ったガンバ大阪のユースに上がってくださいと二宮さんから言われても断ろうと思っていたそうです。僕は成功例を見ていたので、環境が変わったら成功するのではないか、またガンバ大阪へ帰ってくればいいんじゃないかなという大きな気持ちで送り出し

ました。

本田圭佑はガンバ大阪ジュニアユース時代、ほとんど試合に出場できませんでした。プレイ自体は素晴らしいものを持っていたのですが、身体の成長が早くなかったのです。その上、当時のガンバ大阪ジュニアユースは「関西選抜」と言ってもいいほどの陣容で、ものすごくレベルが高かったのです。紙一重の差ではありますが、ケイスケ（本田圭佑）はレギュラーに及びませんでした。それでも自分の夢をかなえるために、クラブを辞めようとしませんでした。そして、ユースへの昇格が叶わないとなると、今度は自身が最も成長できる場所を探し、故郷を離れて石川県の星稜高校に進学したのです。

人数から見るとガンバ大阪のユースに上がれなかったけれども、紆余曲折あって高校サッカーで環境が変わった選手が、2018年ワールドカップロシア大会、2022年ワールドカップカタール大会での活躍を見て、いろいろ考えさせられるきっかけになったというのが正直なところですね。結局、子どもたちの無限の可能性というのがいっぱいあって、ガンバ大阪が全てではないということです。いろいろな高校も大学もあるし、成長曲線も違うと勉強をさせられました。選手自身の素質や才能が当然あって、輝かせる場所があるのではないかなと考えるようになりました。

また、ガンバ大阪ではありませんが、今注目されている三笥薫も一旦クラブを離れています。彼とは直接お会いしたことはありませんが、川崎フロンターレで育てた関係者に話を聴くと、彼は基本的に勉強もよくできるそうです。彼は高校3年生で川崎フロンターレのトップチームにあがらないかと打診されたのです。普通は、夢のプロですから、ぜひお願いしますというところで断ったのです。断った理由というのは、まだ自分は身体ができてないし、当分出場のチャンスはないであろうという言い方をしていました。断った二つ目の理由は、日本代表で川崎フロンターレ出身でヨーロッパで活躍している板倉滉という選手がいます。彼でもなかなかトップで出られない。自分がすごいなと崇める先輩も試合に絡んでない、出るの難しい、時間がかかるのではないかとということで、自ら筑波大学に進学します。ちなみに三笥の卒業論文は「なぜ自分のドリブルは抜けるのか」です。彼でも小学校の時からスーパースターだったわけではなく、中学校の1年生の時は全然駄目でした。1試合でボールに触るのも2回か3回かで、完全に絶不調で伸び悩んだ時期があったのです。しかし、当時の監督がずっと使い続けます。多分、先見の明があったのだと思います。それで、監督にどんな子どもさんですかと聞きました。すると、納得するまでとことんコーチに質問する子だったそうです。いい意味で、納得するまで簡単に引き下がらないということです。勉強ができるとかできないではなく、賢さがあります。彼は今後、日本代表の中心になっていくのではないかと思います。それは彼の本を読んでもわかります。海外のエージェントは21歳までの日本人を狙っているわけですから、大学を卒業して日本代表とか海外に出るのは難しいし、確率的には低い。日本と韓国は大学を卒業した選手でも、日本代表になることができ、海外に自分の活躍を見せられるのだと、彼は本に書いています。

そういう中で、2022年ワールドカップカタール大会の日本代表26名中、なんと9名

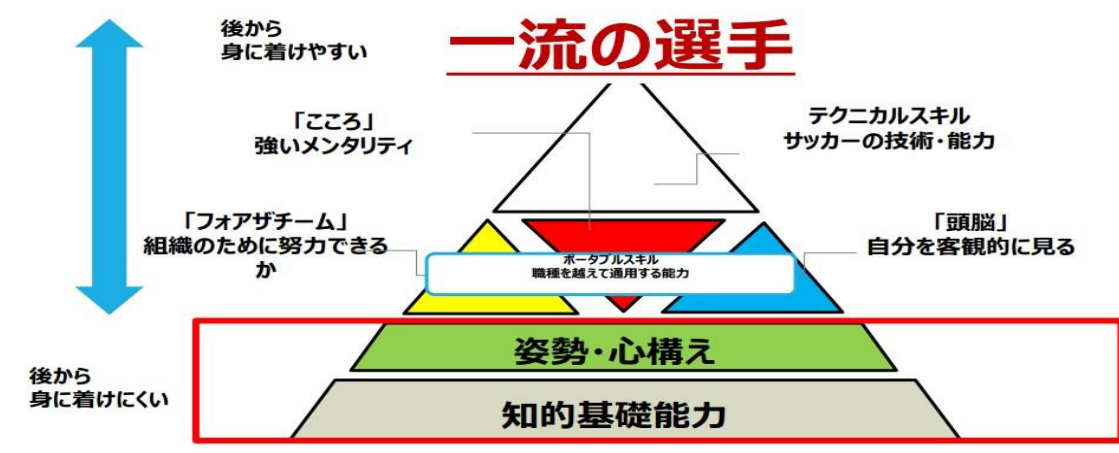
(34.6%)が大学出身者でした。日本のサッカー界の傾向も大きく変わってきています。三笥選手の成功例のように、今後ひょっとしたら、高校 3 年生のときにプロから声がかからなかったけれども、大学 4 年間いろんな教育・教養を身に付けて、高いレベルのサッカー環境の中で世界で活躍する選手が増えてくるかもしれません。

いずれにせよ、プロサッカー選手になっていく過程で、他の選手、指導者との巡り合わせもありますし、選べる環境と選べない環境があります。しかし、一番大事なことは、選手が自分自身を見失わないことだと思います。自分の中に軸を持っている人が、世界で活躍する選手になっていくのではないかという感じがします。

2. 育てる

一流の選手になるためには、技術だとか強いメンタリティだとか、そういうのは後から身につけやすいので、一番大事なのは、幼少期から下図にあるようにピラミッドの土台である「知的基礎能力」と「姿勢・心構え」を身につけることです。例えば、本田圭佑は部員が 150 名いた高校で、3 年間、先生まで 3 メートルの前のほうにいて、必ず両目を見て話を聞いていました。大学の授業で、100 人、200 人がいるというのはたくさんあります。そこでどこに座るのかで取り組む姿勢が全然違うと思います。また、長谷部誠が今ドイツのブンデスリーグで大活躍しています。どういう姿勢が必要なのかというと、当然、日本語は使えないので、ドイツ語なり英語なりが話せないといけません。この二つの言語を行ってからやるのでは遅いので、早くからそういうことをやっていく必要があると思います。本田圭佑は、記者からの質問に対して、英語でジョークを交えて鮮やかに返答しています。つまり、コミュニケーション力があるというのも一流選手として大事なことがあると思います。

■技術はあとからついてくる。幼少期からの教育が重要！



1) プロサッカー選手の現状・成功するために必要な要素

J リーグ選手の報酬はカテゴリーによって違います。現在平均年齢は 28 歳で、プロ入り 3 年以内で結果を出さなければいけない厳しい仕事です。

そんな中で成功するために一番大事なのは人間力です。技術とか体力だけじゃない、人間力も身につけておく必要があります。Jクラブ強化担当者 51 人に「長く続けている選手が備えている人間力として重要なもの」について調査したデータがあります。第 1 にあがっているのは、「相手の話に真剣に耳を傾け理解することができる」です。例えば、人の話を聞くときは、コップを真上にして聞いた方が素直に入りやすい。だから、斜めにしたり、厄介なのは下にしたりすると全く入らないのです。第 2 は、「相手に自分の意見や考えを言うことができる」です。海外に行ったら主張する力もいると思います。自分の考えをチームメイトやコーチや監督に言えるような人でないとやっていけません。だから聞くだけじゃダメなのです。第 3 には、「苦しみや辛さ、怒りなどに耐えることができる」となっており、忍耐力がベースにいてのではないかなという感じがします。

2) 私が関わった 3 名の人間力

日本代表でイタリアのラツィオの鎌田大地、日本代表でドイツのフライブルクの堂安律、そして現在フリーの本田圭佑、この 3 人のことについて、本の中にあることを一部紹介させていただきます。

鎌田大地選手は、小学校 6 年生のときに愛媛県キッズ FC に入って、ガンバ大阪と違うクラブを受けて落ちたのです。そのときに、お父さんから「評価というのは自分でするものではなく、他人がするものだ」と言われたそうです。その後、私に連絡があって、中学校 1 年生のときに練習に参加してプレイを見て欲しいということでした。それに対して「お父さん、1 日だけだったら緊張して体が動かないかもわからないから最低 2 日は見せてほしい」ということをこちらからお願いしました。しかし、僕は 30 分で合格にしました。お父さんと本人の意見も聞いて、帰るときにガンバ大阪、合格です、どうしますか、寮はないですと伝えました。親戚の家から 2 時間ぐらいで来られるので、そこに下宿しますということなので、ガンバ大阪のジュニアユースに来てもらいました。しかし、3 年間で 3 回骨折して良いところがなく、ユースにあがることは難しいということで、お父さんが京都の東山高校にすと言い出したのです。この選択が彼を育てました。お父さんに、「彼がなぜ世界で活躍できる選手になれたのですか」と聞いたら、ひょっとしたら、高校 3 年生のときに自ら手を挙げてキャプテンになったことではないかとおっしゃいました。部員は 100 名以上いますから、まずは C チーム、B チームの練習を見守って、最後に自分が練習をする。それで何か変わったような感じがすると。そしてキャプテンになってリーダーシップを身につけたことで視野が広がったようです。3 年間で 1 回も高校選手権に出ることもなかったけど、キャプテンとしてのリーダーシップが非常に大きかったかもしれないと言われていました。その後、サガン鳥栖に行って、日本代表の中心選手になれたのです。

こういうこともありました。ガンバ大阪のジュニアユース 3 年間で、お父さん、お母さんが愛媛から観戦に来るのですが、自分は試合には出られないのです。帰るときに、「お父さん、お母さん、いつも見に来てくれるのにごめんなさい」と本人が謝ったのです。自分がガ

ンバ大阪に行くことによって、お母さんは今まで家庭の主婦だったのですけれども、愛媛県でアルバイトをし始めました。また、お父さんも大好きなビールを減らすようになったのです。鎌田は子ども心にそれに気づいていたのでしょう。保護者は選手にとっての最高のサポーターです。最高のサポーターに感謝できない選手は、プロとして大成するのは難しいのではないのでしょうか。また、苦しいから、ガンバ大阪のジュニアユースを辞めて愛媛に帰りたいといった時、お父さんは叱らずに、「ガンバ大阪のジュニアユース 20 名の中で一番になったら、いつでも愛媛に帰ってもいい」と言ったそうです。これもお父さんはうまいなと僕は思いました。

次は堂安律です。元日本代表監督の岡田武史さんがカタールワールドカップで一番活躍したのは堂安だと言っています。堂安の中学、高校の同級生に、彼がワールドカップで2点取ると思ったかと聞いてみたら、同級生はみんな「思いました」と答えました。堂安は小学生の頃、相手が危険なファウルをした時、レフリーに文句を言わずに相手に詰め寄るような子どもでした。この子は絶対にやると思いました。そういう中で、小学校4年生のときにガンバ大阪のライバルのセレッソ大阪を受けて落ちたのです。そして、中学校1年生のときに名古屋グランパス、ガンバ大阪、セレッソ大阪からスカウトが来たのですが、ガンバ大阪に来ました。

このときのガンバ大阪は、中学生年代で一番強かったのです。それで、スペインに遠征に行きました。僕も一緒に行きました。これは後で聞いた話ですが、スペインのバルセロナの中学生との試合の前日に、練習でボールに空気を入れ忘れたので、監督が全員に走る練習を命じました。その時、堂安がいきなり監督の横に行って、「監督、申し訳ありません、日本に帰ったら死ぬほど走りますから、どうか許してください」と直訴したのです。試合をするなら体力を温存して、良いコンディションでやりたいのもあったのでしょう。この監督は絶対に許可するような監督ではないのですが。堂安がなぜここまで言ったのかなということ監督やいろんな選手に聞いてみました。すると異口同音に、「堂安は自分のことよりも人のことを考えるリーダーだ」と言います。今でも、恵まれていない国の子ども達に野球のボールを配ったり、サッカーボールを配ったり、ガンバ大阪の試合に小中学生を招待したり、帰ったら必ずガンバ大阪でお世話になった人に挨拶に行きます。そういうことも含めて自然と人が寄ってくるような感じです。だから今回、日本代表の10番になったのではないかと思います。

本田圭佑はガンバで3年間やって、ワールドカップで4点取っています。彼を小学校時代指導していた田中章博先生から、どんな子どもだったかを聞きました。「彼は背伸びの天才です」という答えが返ってきました。小学生で勝ち負けのことよりも、「先生、僕のプレイはどうでしたか」と、自分のプレイの善し悪しをものすごく気にする子だったようです。それは、常に高い目標に向かって、自分に厳しくするということでしょう。彼はチームメイトに文句を言ったりするような光景を見たことがありません。だから、ここまでいったのではないのでしょうか。

このような姿勢を貫き、セリエ A に行って夢を達成したのです。星稜の河崎護監督に、僕は「こんな選手がいるんです。星稜高校を希望している」と言いました。そしたら、本田圭祐は帰るときに「先生、僕を星稜高校で1年生から使ってくださいか」と言ったのです。あとで先生から聞きましたが、「石川の子どもたちにはないおもしろいキャラクターをもっている。ここまで明るく主張するのはすごい」と驚いていらっしやいました。いい意味で、ずうずうしいのです。そのうえで、どんどん彼の良さをこの先生は引き出してくれたのです。この先生との出会いがあったからこそ、ここまでいったのではないかなと思います。やはり人との出会いが大事なのかなということです。

本田圭祐は AC ミランに 10 番を背負って入団します。その入団記者会見は 2014 年 1 月 8 日(現地時間)です。イタリア語を勉強したのが 26 歳と聞いてびっくりしました。英語もペラペラで、日本でも 2 時間勉強しているとマネージャーから聞きました。彼は世界各国、全ての大陸でプレイをしたいといっていましたので、語学は必須でしょう。多分やってないのはアフリカだけです。日本代表元監督の岡田武史さんが「本田の考え方はとてつもなく大きい」と言っていました。どういうことかと私なりに解釈しますと、視野の広さ、奥深さだと思います。彼は日本のサッカー全体、あるいはサッカー以外にまで考えが及んでいたのでしょう。別の言い方をすれば、目先のことに捉われるのではなく、しっかりと将来を見据えている。あるいは枝葉に惑わされず、何が幹かが分かる力、物事の本質を理解する力を持っているということです。

3. 海外研修トピックス

海外で活躍している選手が多いですが、彼らが世界で成功するための共通点を考えてみます。

まず、海外から来て、日本で成功した選手として、フランスワールドカップ日本代表の呂比須・ワグナーをあげることができます。彼は、1 日 8 時間、日本語を勉強し、英語で質問して日本語で答えるということを日々行っていました。また、練習開始の 90 分前に到着し、コーチに目的、練習内容の確認を行い、最大の準備をしていました。これがひょっとしたら 34 歳まで現役でいられた理由ではないかと思います。

逆に、海外に行って活躍している選手では、ドイツブンデスリーガ歴代最年長選手の長谷部誠(独・フランクフルト)をあげることができます。私は長谷部選手とは直接話したわけじゃないですがドイツの選手から、「長谷部から学べ」とみんな言っていると聞きました。僕が一番びっくりしたのは、選手を代表してクラブの社長と話すときに、みんなが長谷部に行ってくれという話があるらしいです。それだけ信頼されています。常にフラットな姿勢で、最大の準備をして、大一番の強さを持っています。彼は 40 歳近くになりますけど、日本サッカー界の中心になっていくのではないかなと思っています。

このように、海外で成功している選手の共通点は、コミュニケーションとしての『言葉』を持っている、自分の考え方をはっきりと自己主張できる、常に人の立場を考えることがで

きる教養あることではないでしょうか。

今日は、いろんなサッカー選手の話をしてきました。もっと深くお知りになりたい方は「一流の共通点—スカウトマンの私がみてきた成功を呼ぶ人の10人の人間力」を読んでもいただければ幸いです。

ご清聴ありがとうございました。

コメンテーター：黒田勇（理事・関西大学名誉教授）

ありがとうございました。最後に教養が大事だという話がありましたが、私が十何年もサッカー部の部員たちに言い続けていたことです。教養は、勉強や哲学やフランス語を知っているととは違う。他者の立場を考える力、それが教養です。大学のサッカー4年間で、それを徹底的に身につけろというのが私の気持ちだったので、そのことをわざわざ書いていただいて、ありがたいです。

今日の話に非常にインスピレーションを受けましたので、事前に用意したコメントとは違う話をさせていただきます。二宮さんがやってこられたことを社会学で、一言で言うと何なのか、それを先にお話をしようと思います。「クーリングアウト」という概念があるのです。「冷却」ですね。人生、社会というのは、必ず社会全体として、若い人材を加熱して、「お前、勉強せえよ、頑張って人生成功しろ」と、一生懸命やることをすすめる。ところが途中で「勉強ばかりが人生ちがうぞ」などと言われます。「それやったら小学校でえんだけやっていたのに、最初からそう言ってよ」とみんな思うでしょうが、世の中とはそういうものです。高校の進路指導、中学の進路指導で、「人生は勉強ばかりではなく、別にもあるから他で頑張れなさい」というふうに言います。これが冷却・クーリングアウトという概念です。

まさに二宮さんは加熱と冷却を両方、責任を持ってやってこられて、見事にそれをやりこなしてこられた方だなというのを思いました。やはり人間が育って生きていく上では、この冷却が大事です。人生は競争で勝負だ、勝つものだと言ったり、負けることもあると言ったり。二宮さんがやられたのは、ちゃんと敗者復活の上手な道も理解されていて、それを進められた。それが意図されていたのか、結果としてそうなったのかはいろいろあると思います。その一つが我々の大学を上手に使っていただいているのかなと思います。つまり、サッカーをやりたい人たちがそのままJリーグへ行行って世界に飛びたいところを、ちょっと無理だという場合に、「クーリングアウト」として大学進学の手道もうまく使っていたのだなというのを改めて思いました。

先ほど紹介されたの関西大学出身のJリーガー前川、黒川、荒木とか、みんなそうです。大学の4年間ならではの何かを身につけてもらったらJリーグに行っても何か違うのだということを私は彼らにしつこく言っていたのです。今日のお話はまさにそういうことだったのだと、私は非常にありがたい気持ちで伺いました。慰めて冷却するのだけど、ちゃんと次の道も用意しつつ相談されていたのだなと思いました。余計なお話だったかもしれませんが、「クーリングアウト」とはそういう概念だということを持って帰っていただければと

というのが一つです。

皆さん、これからいろいろ質問やご意見があると思うので、私から言いたい話をもう一つだけに絞ります。やっぱり本田圭佑の話かなと思います。頭と身体と心のバランスということをおっしゃっていきまして、そこに私達も貢献できたかなと思っているのですが、本田圭佑は大学に行っていない。でも、彼は言葉の力、主張する力をすごく持っていたということで、そのことから思い出したのが、本田圭佑のブラジルワールドカップの予選が終わったときに、関西大学へお忍びできてくれたときのことです。大スターが試合で戦った次の日にすぐに来たので、一般学生に話を聞かせるのは難しいということで、限られた体育会の学生に聞かせました。そのときの最後の一言が素晴らしかったので、私はそれから何年も年賀状に書き込んでいます。

どういう言葉かといいますと、最後に質問した学生が、「私は心の病を持っている」と言って、次のように質問しました。「本田さんはずっと強い心があって、強いという言葉が何回も出てくるけど、私は全然強くないので、本田さんの強さは何か教えてください。」

そのときに NHK のカメラが入っていたので、本田選手は適当に答えるのかなと思ったから、彼は1分ぐらい下を向いて沈黙しました。私が助け舟を出そうかなと思ったときに、顔を上げてこう答えました。「僕の強さは自分の弱さと向き合える力のことかな」と。彼は本物だなと私は思いました。周りにいた職員たちも、世界で活躍する選手26歳、やっぱり違うなと、みんな感動しました。そのときから本田選手が大好きになったのですが、そのお話を今日、思い出しました。まさに彼は言葉というのをしっかり持って、自分自身と向き合っていて、言葉で自分のプレイ、自分の将来を考えていたのだなと思いました。

以上、二宮さんのお話から思い出したことをお話しました。

ナビゲーター：二宮 博（元ガンバ大阪スカウト）

この本で取り上げた選手だけで日本代表ができるのではと思うのですが、徳間書店さんからすると、本田圭佑というピースが一番強い。彼は SNS でも英語で発信し、どこでそういうものを身につけたのかなというぐらいです。彼の成長ぶり、日本全国各地で日本代表のサッカーの試合を通して、日本サッカー協会に限らず、どんどん発信している。なぜ、ここまでするのかということで、1回お会いして、聞いてみたいのです。すごい考え方をし、やはり海外で学んだとかいろいろ書いていますが、サッカー界、世の中を含めて本田圭佑の発信力が今、注目されているということを僕は大変、うれしく思っています。

《第 29 回セミナー》

「中学校運動部の地域移行」政策から考えるスポーツクラブ

ー 公共圏と社会運動の視点からー

水上博司氏（会員・日本大学文理学部体育学科教授）

はじめに

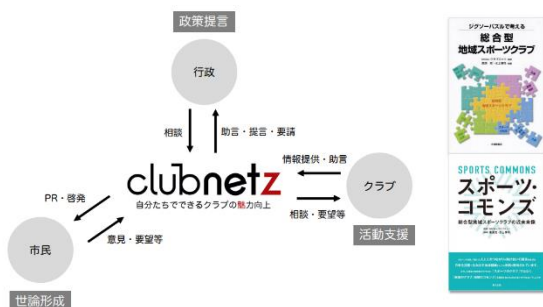
皆様、こんばんは。日本大学の水上でございます。この度は、10月セミナーのナビゲーターとして、発表させていただく機会を与えていただき、本当にありがとうございます。心より御礼を申し上げます。

さて、本日のテーマである「中学校運動部の地域移行」政策は、学校期の子どもたちに相応しいスポーツ組織とは、いかなる価値を有するのかを考えることであると思っております。そのために「スポーツクラブ」とは何かを中心に話をしたいと思います。

地域移行は、すでに多くの実践が生み出されていますので、そういう話をお聞きになった方からすると、私の話は理念的すぎて、そのままダイレクトに実践に役立つというものではないと思います。また、学校の教員や総合型クラブのマネージャーが登場するわけでもありません。それでも、これまであまり馴染みがなかった言葉として「公共圏」と「社会運動」に着眼して、これからのスポーツクラブを考える際の視点としたいと思います。そして、中高生には、この二つ視点で考えるクラブづくりを自覚し、その実践事例を、少しずつでも誕生させることができればと考えています。中には無理だよと思われるかもしれませんが、本日お話しするクラブの完成形を目指すのではなく、目指すべき方向性として少しずつ刻んでいくという気持ちで聞いていただければ幸いです。

私は、日本大学文理学部体育学科でスポーツ社会学やスポーツ行政、制度論、プロモーション論のほか、バレーボールの実技を担当する教員です。こうした大学に職域がありながら、私は自ら総合型クラブを支援する NPO 法人を 1998 年に設立し、2018 年に解散するまでの約 20 年間、法人の事務局を担当してきました。「クラブネッツ」という名前の法人で、総合型地域スポーツクラブの啓発や設立、育成を支援する団体として、スポーツリーダーらの発掘と育成、そして、総合型クラブのネットワークづくりのための橋渡し型の NPO を運営していました。ここでの橋渡しとは、総合型クラブとの関係だけではなく、行政に対しては、政策提言、市民には総合型クラブについての世論形成を行なっ

1998年 設立 ▶ 1999年 NPO認証 ▶ 2014年 認定NPO ▶ 2018年 解散



いました。

そのほか、朝日新聞社と組んで神戸、大阪、東京で3回のスポーツライフシンポジウムを開催したり、マイタウンクラブという冊子名で、全国の総合型クラブのデータベースを作成し、これを無料で配布したりしておりました。もちろん、ホームページやメーリングリストの運営もしておりました。

こうした20年間のNPO活動振り返って思うことは、何よりも、一つ目が、大学教員とNPOの二重生活は辛かったということ、二つ目は、自分がやっていたNPO活動は、政策立案に絡むような活動ではなかったとはいえ、今日のサブテーマにもなっているスポーツの社会運動のひとつでもあったなという気づきでした。そして最後は、クラブとは何かという本質的な議論が、なかなかされないという葛藤でした。気づけば、複数の組織の連携や協働のあり方、人、組織の資源の配分や役割が議論されているばかりであったというジレンマでした。そんな私自身のNPOの振り返りを受けて、本日の話ということになります。

運動部モデルのメカニズム

それでは本題に入りたいと思います。学校運動部の休廃部をめぐる、まず私自身が現在の運動部活動をどのように見ているのかについて説明したいと思います。

大阪のPL学園の野球部が廃部するということと、その背景にあった数々の不祥事を2016年6月に朝日新聞が報じました。高校野球界での素晴らしい実績があっても、学園が野球部はいらぬということを決定すれば、スポーツは簡単に無意味化されてしまい、廃部の決定がなされていることを意味しています。

それは、企業でも同様で、日立製作所の業績悪化を理由に廃部となる女子バレーボール部、また、男子バスケットボールのいすゞ自動車、監督退任をきっかけに廃部にするということが起きます。

こうした相次ぐ運動部の廃部は、学校の教育方針、企業の経営方針にそぐわない組織であれば、運動部は存続する意味のないスポーツ組織として位置づけられていることがよくわかります。これは学校や企業という「親組織へ依存」する組織として位置付けて良いと思います。

そこで、学校運動部はいったいどのように形成されてきたのか、その形成史研究を振り返ってみますと、戦前は日下裕弘（1985, 1988）や坂上康博（1986）の研究が詳細を明らかにしていますし、戦後では、中澤篤史（2014）の研究が代表的です。このほかにも数多くの形成史研究がありますが、共通しているのは、「社会制度としてのスポーツ」の確立に大きく貢献したスポーツ組織であるということです。それゆえに、日本のスポーツの公共性を、かたちづくってきたとも言えます。

私は、こうしたスポーツ組織を「運動部モデル」と呼んで、「クラブ」との違いを自覚するために、次のように説明することにしていきます。

「運動部モデル」とは、学校の教育方針や企業の経営方針といった親組織の論理のもとで

スポーツ活動の組織性が方向づけられたスポーツ組織。その組織性ゆえに協会や連盟、競技団体などは、運動部モデルを基準とした団体加盟や個人登録を条件に、競技会などへの出場資格を制度化してきたということです。

親組織である学校の教育方針に運動部が合致していれば、大変豊かなスポーツ環境が準備されますが、先程の PL 学園のように、親組織からスポーツが無意味化されてしまうのも、運動部モデルです。すなわち、学校スポーツのメリットは、なによりも教育の制度と論理のもとで組織化・統治化されてきた運動部活動であるため「教育的」価値を有する子供たちのスポーツ環境であるとする言論の空間が、私たちの運動部観を作っていることにあります。

こうした「言論」の空間とは何か、教育学の広田照幸（2001）は、教育的という言葉が、「あたかもある望ましい規範が共有されているような語」として、それを語っていれば、批判を受け入れず、恣意的・無限定的にどんどん拡大解釈されて、その言葉が、周りの人を黙らせる「殺し文句」の一つになってしまうと、新堀通也（1996）の言葉を引用しています。

私は、こうした「運動部モデル」は、「教育論理」に支えられるスポーツ組織としてのメリットも、もちろんありますが、クラブを考えるためには一旦、この論理から離れる必要があると考えています。

こうした制度や論理に依存する組織観は、決してスポーツ組織だけではありません。平凡社の「思想の科学」という編集部が、1970 年代の半ばに「集団」をテーマにした共同研究を行っています。そのプロジェクトの代表的な論者であった鶴見俊輔（1976）は、なぜ「サークル」を論じなければならないのかという論文を発表しています。その内容をクラブ論に置き換えて考えてもよくわかります。そこにあるのは、親組織の制度や論理に回収されやすい集団、組織思想です。彼は、「会社の計画にそって行われるサークル活動、政党の計画にそって行われるサークル活動・・・（中略）・・・そうするとサークルの分析は当然に、サークルより大きい母体である団体の分析を含むことになってしまい、サークルという目的的な集団の結成論理や継続論理が説明されず、母体である組織の制度や統治性に回収されてしまう」というふうに指摘しています。

とはいえ、スポーツという身体活動が生み出す祝祭的な空間は、親組織という制度や論理に振り回されないコミュニケーション空間や結束力を生み出すと私は考えています。

運動部モデルと教育論理

親組織に依存する運動部モデルではありますが、実質的には、社会から支持される仕組みを作り上げてきました。ここで、いくつかのデータを紹介しながら確認したいと思います。

ベネッセ教育総合研究所のデータでは、親の年収が 400 万円未満と、400 万円から 800 万円未満、800 万円以上の三つの年収の違いからみて、親の年収が高い世帯の子どものスポーツ活動率が高いことがはっきりと現れています。また、小学校では、民間経営のスポーツの場で半数以上（55.1%）が活動していますが、中学校への進学を機に、61.3%が部活動となります。さらに、親がスポーツ活動に期待する内容をみると、小学校期の親の願いは、

特に健康な体や集中力、楽しむこと、得意なことを伸ばすことのように個の力を伸ばすことを期待しています。一方、中学校期では、集団をまとめる力、技術の上達、成績をあげる、トップレベルを目指すといった期待に変化しています。(佐藤暢子 2019a, 2019b)

このように、民間経営の小学校と部活動の中学校においてスポーツが果たす役割は明確に区別され、自覚されていることがわかります。

ここでJリーグのデータと新聞記事をお示ししたいと思います。

今から20年以上前のデータですが、Jリーグの各クラブに所属するジュニアユース世代とユース世代の誕生日を比較すると4月、5月、6月の春、夏生まれが多数派であり、1、2、3月生まれは極端に少ないことが分かります。(J.League.News. 2003) 学年という教育制度による影響がわかる明らかなデータで、日本のサッカー界では、すでにこうした影響を排除し、誕生日のプレとポストで格差が出ないように是正をしています。他の競技種目でも、ようやくこうした教育制度の弊害を修正する動きがあるようですが、それも一部でしかありません。

また、運動部の体罰問題は、全国85の新聞社で取り上げた記事を集めた特集号が出版されるほど、社会問題であることは明かです。その中で、茨城県の小美玉市の運動部で、ボランティア指導者が子供に重傷を負わせるという出来事の記事には「学校の責任不明確」

「校長の面談必要」というように学校側の管理責任、指導責任が問われていることが記されています。すなわち、学校運動部は、プラス面においては、平等性、低負担、社会性の獲得に貢献できますが、対象的に不平等、高負担、反社性がマイナス面であり、加えて、勝利至上主義、体罰や暴力、アンペイドワーク、スカウティングなど、過剰さとされる活動を擁護し、聖域化してきた対象であったことは否定できません。一生懸命に頑張っている顧問に対して、周りの先生から行き過ぎではないかなどと言いにくい雰囲気、それが、肥大化・聖域化し、学校、協会や連盟まで、インナーサークルと言っても言い過ぎではないスポーツ界が形成されてきました。

したがって、運動部において、何らかの問題が起こった場合、その課題解決の引き受け手は、常に学校といった親組織の監督責任、いわば統治のあり方に向けられてきました。こうした教育論理に支えられるスポーツ組織では、いつまでも、教育の側からのスポーツ組織を語ることばかりで、スポーツの側の論理が不在のまま、クラブなる組織論を語ることにはできないと私は思っています。

こうした教育論理とスポーツの関係性が、決定的に擁護されたのは、1980年代にあると私はみています。

たとえば、中高の校内暴力が大きな社会問題となった1983年を取り上げてみますと、社会、経済、消費文化や若者文化において自己差異化への試みが広がり、それは学校の生徒評価の多様性にもつながっていったと言われています。そこから連なるように、学業だけではなく、運動部活動や芸術活動も成績評価の対象とされ、高大への進学条件にも位置づけられた存在となった運動部に対して、疑問をさし挟む余地がなくなり、擁護・聖域化が進んでし

まったとみています。こうした教育論理や制度からみたスポーツは、「地域移行におけるクラブ論」の不在をも生み出しているのではないかと、私は危惧をしています。

教育の論理は若者世代の研究にも影響を与えていました。たとえば、サブカルチャー研究の難波浩二（2007）は、「族の系譜学」の中で、サブカルチャー研究は国内において「巨大な空白地帯」であると指摘しました。その理由を学校期の教育思想に後押しされ、それをメインカルチャーとして徹底的に擁護し、そのカルチャーの内部で人格形成させることの論理に縛られていたからであると言っています。この言葉を借りれば、クラブ論は「巨大な空白地帯」となった研究領域であると言っても過言ではないと思っています。

スポーツ組織論におけるクラブ論の不在

こうしたクラブ論の「空白地帯」であることに、私は大いに賛同するわけですが、菊幸一（2023）も空白地帯という言葉は使っていませんが、スポーツ組織研究の低調さを、次のように述べています。

「これまでのわが国におけるスポーツ組織研究は、全般的にきわめて低調であること、そして、その理由を日本のスポーツ組織が、ヨーロッパに見られるようなスポーツ活動を支える自立したクラブによって編成されていないことにあり、もっぱら学校や企業といったスポーツ以外の（スポーツを手段とする）組織に依存してきたことにある」。

また、荒井貞光（2003）は、行政の総合型クラブの委員会に出席した際の感想として、「筆者自身、このプロジェクト（総合型地域スポーツクラブ）に県、市レベルで関連する委員会に出席しているが、主導する行政担当者は、国県市町村の間の調整、連絡、事務作業に忙しく、クラブづくりの現場では、補助金頼み（サッカーくじの分配金など）が現実で、またわれわれ委員も、視察や講習会、会議をセッティングするが、クラブとは何かという本質論に議論が及ぶことはまずない」と述べて、クラブ論が不在であることを指摘しています。

さらに、日本にいち早く、西ドイツのスポーツクラブを紹介した元日本スポーツ少年団本部の増田靖弘（1971）は、「クラブ」という組織像がイメージできず、言葉として定着していないことを指摘し、共通して言えることとして、人々の特定の結びつきの状態であること、チームとクラブの重なり合いや違いを考えることへの関心から、1979年から80年にかけて「スポーツクラブを求めて」という連載を体育科教育という月刊誌で発表しています。連載の最終回では、クラブと市民社会を結びつけることができたという着地点を述べています。

そして私は、現在の地域移行の議論においても、「クラブ」とは何かといった本質的な議論はあまりなされていないように感じています。

地域移行は、検討会議の提言やスポーツクラブ産業研究会による「未来の部活ビジョン」の公表、また日本スポーツ協会では、加盟団体同士のミーティングや総合型クラブのクラブマネージャーらの情報交換の場が盛んに設定されるようになっていきます。もちろん、地方の自治体や連盟、協会、各競技団体でも、様々な会議体が作られ、一部では社会実験的な取り組み

みが行われるようになっていきます。

1971年に「体協時報」という雑誌に紹介されたものでは、熊本県で発生した柔道の重大事故を受けて、取り組まれた水俣市での地域移行事例があります。体協時報では、これを70年代に取り組まれた地域移転の失敗事例としても対象化し、その主たる理由は、地域の側の受け皿である組織と制度の未成熟であったと指摘されています（財団法人日本体育協会1971）。そのことには、大いに共感をしますが、私には「クラブ」の本質論が議論されていなかったと見ています。

また、スポーツ庁では、全国各地の実践事例を集めて、インターネットで公表していますが、その多くが、組織間の連携のあり方や学校と地域スポーツの関係性が議論されるばかりで、ここでもクラブ論の本質的な議論は不在であると感じています。

たとえば、奈良県生駒市スポーツ課の西政仁（2022）さんが、大変丁寧に「地域移転を進めるために必要と考えられること」と題して11項目をリストされています。どれも「組織間連携」や「行政との関係」「協働」という点が強調されています。もちろん、この11項目を一つ一つ詰めていくことが、クラブの本質論へ近づいていくことになろうかと思いますが、私は、こうした議論があまり前に出過ぎると、結局は、教育制度の下に依存するスポーツ組織が再び違った形で成立するだけではないかということを危惧しています。

クラブの本質とは何か

では、「クラブ」の本質を考えると何かということについて説明をしていきたいと思います。最初に、そもそもスポーツ組織とは何かを確認しておきたいと思います。

最新スポーツ大事典の中で佐伯聰夫（1987）が「スポーツ組織」の項目の執筆をしていますので、まずはそれを参照したいと思います。ここでは、スポーツは、さまざまな規則によって秩序づけられた活動であり、そのスポーツ活動の性格を成り立たせているものは、本質的に組織的活動であると述べています。そして、スポーツ組織とは「スポーツに関する特定の目標を達成するために、複数の個人および集団の活動を統制する地位と役割の統一体」と定義しています。この「活動を統制する地位と役割」を学校や企業の論理に依存することなく、自己規律性、すなわち自治に基づいて統制されることであるとしています。

では、クラブとは何かを4名の論者から考えてみたいと思います。

まず、クラブを人類学的な視点から研究した綾部恒雄（1969）を取り上げたいと思います。彼はアメリカ社会のクラブの形成過程を研究し、クラブの姿を「何か社会的な改良や改革を思いついた場合、決して政府や関係機関にそれを押しつけようとは考えない」と捉え、「手に手をとって、目的達成のために障害にぶつかっていく」と述べています。

次に教育学の城丸章夫（1993）を取り上げたいと思います。彼は、クラブの自治をめぐる研究の欠落を指摘しており、「クラブのあり方においても、練習や試合のしかたにおいても、民主化を徹底するしかない」こと、そして、「クラブの自治ということを考える機会が決定的に欠落している」と論じました。

次にクラブ文化論を提唱した荒井貞光(1977)のクラブの定義を紹介します。彼は、クラブとは、「成員によって定められた約束に賛同し、自発的に加入する成員によって運営される」というふうに定義しています。

最後に、エーリッヒ・フロム(1969)というドイツの哲学者のクラブ論を紹介したいと思います。「自由からの逃走」という有名な著書がありますが、私はむしろ「希望の革命」という著書の方が、クラブの意味を考える上で大変重要であると感じています。この著書の最後の方に、少しだけですがクラブのことを書いています。彼は、「新しい態度を創造することであり、人間を変革することといい、政治という権力よりも、もっとも効果的に他人を動かすこと」ができるといい、真剣に討議することで、真の問題点を指摘できるのだとも言っています。

こうして4名を取り上げてみると、決して学校や企業といった「親組織」の論理に依存しているわけではなく、佐伯聰夫(1987)がスポーツ組織を定義した際に述べたように「活動を統制する地位と役割」に徹底した自己規律性、すなわち自治が求められている組織であることがわかります。

では、それはどんな自己規律性であるのか、具体的な事例をイメージしてもらうために、英国のクラブの社会史を数多く紹介した McIntosh, P.C. (1963) というスポーツ社会学者が取り上げている競馬クラブの例を紹介したいと思います。

「競馬というスポーツは、ジョッキー・クラブ(Jockey Club)によってよく統制されていた。このクラブは1750年ころに、ニューマーケットでのレースに興味をもった紳士たちの、気楽な会食クラブとして発足した。次第にそれはあらゆる論争の仲裁者となっていった。このクラブの威信と権力は増大していったので、1791年に摂政皇太子(Prince Regent)お抱えの騎手チフニイ(Sam Chiffney)が、二つのレースで八百長をしたと疑われた時、共犯の疑いを、何ら、もたれなかった皇太子自身にたいして、ジョッキー・クラブは、皇太子がチフニイを雇っているかぎり、いかなる紳士もチフニイと競走しないであろうと通告する単純な手段を用いて、競馬場から立ち去るよう警告した」と記しているとあり、少しでも八百長が疑われると感知した場合には、競馬というスポーツの公平性を保つために、たとえ皇族であっても、立ち去るように命じてクラブの威厳と権力を固持していることがわかります。

公共圏としてのスポーツクラブ

では、本日のサブタイトルの「公共圏」について考えていきたいと思います。

これまで、クラブとは何かということを、しつこいほど色々な論者の話を引用してみましたが、そこにあるのは約束事を決めたり、公平性を保ったり、クラブの自治を維持するための話し合いの場といったコミュニケーション空間と、それを通じて「クラブの威厳」を保っていることが想像できます。そうした空間の重要性を「スポーツの公論」という言葉で、スポーツクラブの意義を最初に論じたのは菊幸一(2000)です。彼は「地域スポーツクラブ

の公共性は「地域-スポーツ-クラブ」それぞれの要素がスポーツへの愛好を核としつつ、地域とクラブとの開かれた私的交流を確保し、合理的なコミュニケーション的行為を豊かにしていくことで公論を形成していく基礎を提供し得る」と述べて、スポーツの公論が再生産され続けるクラブこそ公共圏を創出する社会空間であると、初めて「公共圏」という言葉を用いてスポーツクラブの意義を論じています。それはこれまでの、教育論理のもとで制度化された「上から」の「スポーツの公共性」を「下から」の「スポーツの公共性」に切り替えていくことだとしています。

では一体、公共圏とは何か、どうしてスポーツクラブを考える際に必要なのかについて確認したいと思います。

公共圏を考える際、ドイツの社会学者ハーバーマスを抜きにすることはできません。

Habermas, J. (1990) は、公共圏を「アソシエーションと言語を用いて異質な人々が対等の立場で公的な社会課題に対して連帯する自己組織化された社会空間」と定義しています。

ここでいうアソシエーションは、クラブに当てはまります。また言語はコミュニケーションであると考えていただければよろしいかと思います。そして、7つの特徴を上げています。

1、諸制度に拘束されない組織、2、対等な立場で集まっていること、3、公的な社会課題において連帯していること、4、自己組織化されていること、5、表現の自由、つまり言語を受け入れるということ、6、コミュニケーションの発話が個人の自由意志に基づいていること、7、言語はなんら制約を受けることなく人々に公開されることと特徴を上げています。

こうして7項目をあげてみると、公共圏は、たいへん高いレベルの自治が実現され、対等な人々が質の高いコミュニケーション空間を生み出していると考えられます。ハーバーマスは、こうした公共圏のもとで、みんなで決めたことの妥当性を、コミュニケーション的合理性と定義しました。

しかし、この合理性は、決めたことが妥協の産物にさせてしまうという議論があります。たとえば、ある物事の決定に対して、バレーボール部は妥協、柔道部は無関心、スキー部は我慢を表して、バスケットボール部の主張において合意したとします。合意は、こうした妥協が伴っていることの自覚も必要ではないかと感じています。

そこで私は、公共圏はコミュニケーションを通じた合意形成を、最終的な目的とするのではなく、民主的な意見形成や意思形成といった手続き（プロセス）における公共的意思を、行政へ働きかけるという行為に、正当性を与える社会空間、すなわちクラブをこうした社会空間に位置付けることが必要だと感じています。

荒井貞光（2003, 2020）が提唱したスポーツ空間論では、「コートの中」という、プレイヤーの勝つか負けるかを競い合うドキドキハラハラの空間の外に、プレイ前後の「コートの外」という空間が、勝敗に関係なくプレイヤーを対等な立場にし、互いのファイトをリスペクトしあうコミュニケーションが成立する社交空間の意義を強調しました。

たとえば、わかりやすいのがラグビーのノーサイドの思想やアフターマッチファンクションと言われる社交空間の存在です。私は、こうした社交空間はホンネの関係が成立する部

分もありますが、むしろタテマエで成立するコミュニケーション空間でもあるというふう
に考えており、クラブ論は、公共圏の社会的なコミュニケーション空間だけでは不十分であ
ると思っています。

社会運動としてのスポーツクラブ

そこで、もう一つのサブタイトルの社会運動に視点を移して、愛好者の声を代表するクラ
ブという項目の説明に入りたいと思います。

実は、クラブ文化論の荒井貞光（1977）は、初期のクラブ論の中で「スポーツのグループ
作りは一種の社会運動」であると、さらりと記述していましたが、その後の彼のクラブ論の
中で、社会運動という言葉を用いてクラブ論を展開することはありませんでした。しかし、
彼の中には、クラブが地域スポーツの公的な社会課題に関心を持って、行政という公共以上
に、愛好者の声を下から吸い上げて、地域スポーツのイニシアティブを発揮する重要な社会
運動体であるという思いがあったことは、間違いないと感じています。

社会運動体としてのクラブは、愛好者の声を代表する組織であることがイメージしやす
いのではないかと、それを起点にしておくことはクラブとは何かを考える上で大切ではない
かと思っています。

国のスポーツ政策の立案過程にアドバイザーとして度々関わってきた佐伯年詩雄（2007）
は、日本のスポーツ組織について、「いわば良きアマチュア時代のボランティアの体質を持
つ趣味的団体の面影を強くとどめているのです。このような組織体制では、先に述べた 21
世紀日本スポーツの大いなる使命を担うことはできないでしょう。だから、数千万人のスポ
ーツ愛好者の声を代表し、それを政治に届けたり、スポーツの世論を一つのパワーにまとめ、
スポーツの自由と権利を主張し、また守るスポーツの統治組織が望まれるのです」と述べて
います。また別のところでは（2009）、「かつて、芸術と文化を振興するための法の制定が組
上にのったとき、これを国家による『芸術文化の自由に対する政治的干渉』と見る立場のア
ーティストが反対運動を組織し、国による芸術文化の振興と芸術文化の自由尊重を擦り合
わせるべきロジックが闘わされた」と述べて、スポーツ界の行政施策や制度への無関心さを
嘆いていました。つまり、クラブとは、愛好者の小さな声を集めて、それをクラブという活
動を介して公的な課題にグレードアップする役割があると思っています。

こうした愛好者の声を代表するクラブの意義を考えること、それはスポーツの公的な課
題を考えることであり、ひとつの社会運動体としてクラブが存在することを意味している
と私は考えております。たとえば、有賀郁敏（2019）はドイツのトゥルネン協会の形成過程
の研究において、その組織化過程では、協会や組織から排除された人々が、対抗的な公共圏
をつくり、そこで結束した人々がユダヤ人の協会や労働者の協会を作っていくといったこ
とを明らかにしています。

クラブは、こうしたプロセスを経ていくことを、中高校世代から自覚させ、スポーツを
やりたいという声があれば、それをクラブ内において受け入れつつ、合わせてクラブという

自治における規律も学んでいくような社会空間であることが必要であると考えます。

では、社会運動とは何かについて押さえておきたいと思います。

とても簡単ではありますが、「社会にあるさまざまな問題を解決するとか、あるいは社会そのものを変革するために、議会や選挙といった狭い意味での政治的な制度の内部ではなく、その外部で形成される『普通の人々』の集合行為である」と定義しました。こうした集合行為について、あまり機会や経験が少なく、不得意なのが日本社会であるように思っていますが、スポーツはクラブを通して、こうした集合行為を擁護し、その機会を作るという姿勢を、今回の地域移行をめぐって考えていくことが大切ではないかと思っています。

2018年8月にスウェーデンのグレタさんが始めたフライデー・フォー・フューチャーでは、全世界への賛同の呼びかけに対して、2019年3月には、ドイツ国内の500地区に30万人が集いました。これに対して日本は、東京と京都で280人でした。またこの運動の機運が高まった2019年9月には、ドイツ国内の500地区に140万人が集いましたが、日本では26都市で、ようやく5000人でした。この運動に対して、決して関心がないわけではありませんが、こうした集合行為に参加することの機会が圧倒的に少ないというのは、むしろ大人側の責任ではないかと思っています。

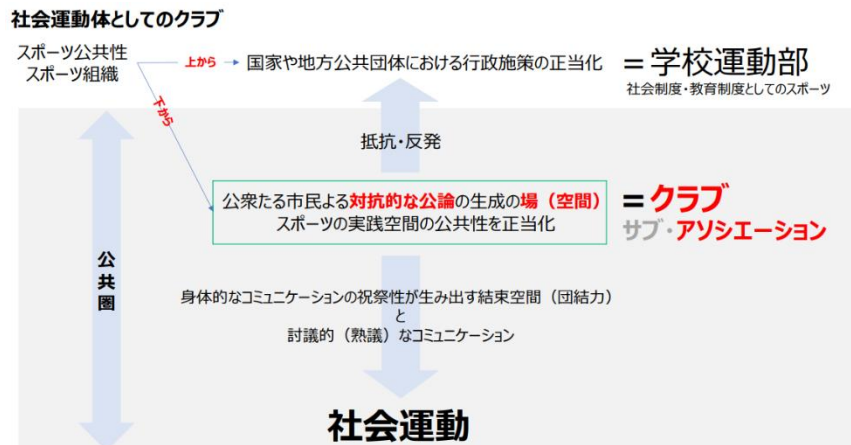
社会問題への関与や自身の社会参加について、「社会現象が変えられるかもしれない」という質問に対して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した若者たちを他の国と比較すると、日本は30.2%であるのに対して、ドイツやアメリカは52%を超えています（内閣府 2013）。これが本音かもしれませんが、そもそも社会参加の機会が少ないことが理由になっていると思います。

一方で、「自国のために役立つようなことをしたい」という質問に対しては、日本はスウェーデンの53.7%を上回り、54.5%となっています（内閣府 2013）。若者たちの社会観に、身近なスポーツの課題に向き合い、それに対して少しでも行動するということから、ゆくゆくはスポーツの公的課題の解決に結びついて、自国に貢献できているということを自覚できる社会空間が、学校以外のクラブという場にあっても良いと思います。

どうしても理念的な話にはなってしまいますが、それでも私は、公共圏や社会運動に着眼したクラブという組織に直に触れる機会が中高生世代から必要であると思います。こうした若い世代からスポーツをする、みる、支えたいという若者たちの声が自由に発せられること、ただし、その自由はなんでもOKではなく、クラブをとおしてスポーツの組織的活動におけるあらゆる規律性を、教育論理ではなくスポーツの論理から学ぶという機会です。地域移行という大きな転換期に、そうした視点に着眼した実践事例が数多く生まれてくることを期待したいところです。

まとめ

これまでの話の繰り返しにもなりますが、まとめをしたいと思います。

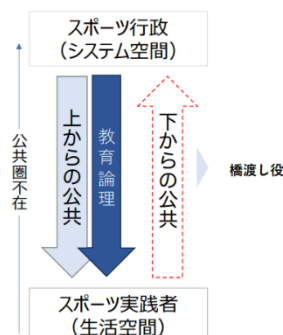


1) クラブとは、日々の実践空間において、地域スポーツの公的課題を考える公論生成の場をつくること、それは、愛好者を中心としたスポーツをする、みる、支える

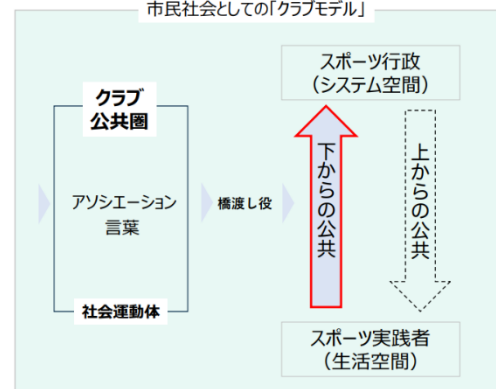
というさまざまなスポーツ活動の祝祭的な場や結束の機会を経て、生み出される小さな声やささやかな要望に耳を傾けること、そして、それらの声を集めて、クラブが生み出すスポーツ活動の公共性を正当化していくことにあります。場合によっては、行政施策に対して反発し、対抗的な公論を生み出すための討論の場もクラブの当然の使命として受け入れることが必要だと思います。

2) 左側の図は、これまでの教育論理にもとづく上からの「スポーツの公共性」をあらわしています。「下からの」の声や要望を受けるスポーツ組織があったとしても、スポーツ愛好者の論理ではな

社会運動体としてのクラブ
教育制度に依存する「運動部モデル」



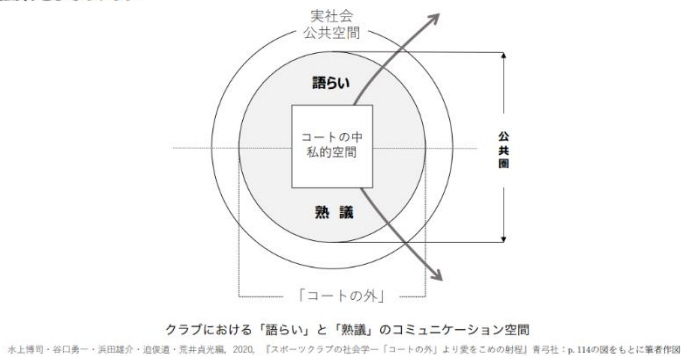
市民社会としての「クラブモデル」



く、教育論理のもとで、スポーツ環境が整えられてしまうことを図示しています。

これに対して、右側の図は、クラブが橋渡し役となって、公共圏と社会運動に着眼したクラブ運営がなされることを図示しており、スポーツ実践者である愛好者らの要望や声に正当性を与えます。クラブを介したスポーツ活動であるからこそ、下からの「スポーツの公共性」を語れるという「クラブモデル」を意味しています。

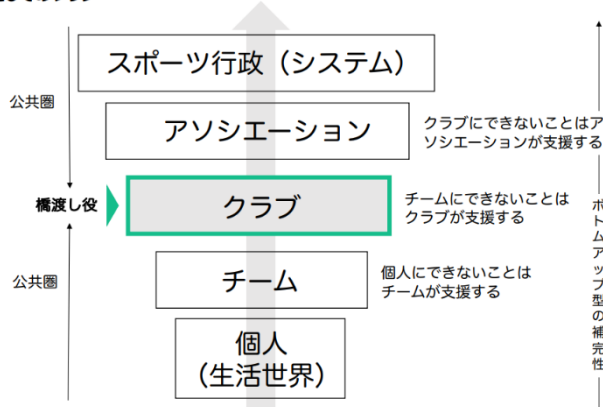
社会運動体としてのクラブ



3) 左図は荒井貞光がスポーツ空間論で提唱した「コートの中」と「コートの外」を図示したものです。ただ、彼の「コートの外」のコミュニケーション空間に、二つの機能を位置づけています。互いに対等な立場で語らう自由な社交的空間とクラブを運

営していくためのしっかりとした討論が成立する熟議空間の二つです。それら二つの空間は、スポーツをする、みる、支える、という活動がクラブという自治組織から生み出されていることを自覚する大切なスポーツ空間であると思います。クラブの外の制度や論理に依存しない、スポーツの側の論理を徹底的に擁護するという姿勢が貫かれる空間でもあります。

社会運動体としてのクラブ



4) ただ、クラブ以外はなんでもダメか、というものではなく、左図のようにクラブを真ん中において、下は個人のスポーツ実践の生活世界とチーム、そして、上には協会や連盟、競技団体などのアソシエーションと、スポーツ行政というクラブの外は常に意識しておく必要があります。クラブは下からと、

上からの声を橋渡しする役割です。私は、この5つのフェーズのスポーツ組織の関係性を、「ボトムアップ型の補完性原理」からイメージしたいと思います。個人にできないことはチームが補完し、チームにできないことはクラブが補完、クラブにできないことはアソシエーションが補完するという統括原理です。クラブの運営は、個人やチームの活動の豊かさを生み出し、アソシエーションの統治性は、個人、チーム、クラブから集まるさまざまな声が結集したものであるとする考えです。

おわりに

最後に二つほど、話をしたいと思います。

Habermas, J. (1990) は「公共圏の再封建化」という言葉を用いて、公共圏の考え方には注意が必要であることを言っています。それはスポーツの公論が知らず知らずのうちに、

スポーツ行政の制度を補完するような役割を果たしてしまうことへの注意でした。ハーバーマスは、クラブのコミュニケーション空間が、「スポーツ行政のシステム」を批判するだけでは飽き足らず、気づかないうちに、次第に現在のスポーツ制度を補完するような公論を作り出してしまうことを「公共圏の再封建化」と定義づけました。すなわち、親組織の支配下で活動するスポーツ組織から、たとえ公論に該当するスポーツの公共圏が現れたとしても、結果的には、親組織の改善と補完につながり、さらなる親組織の支配と依存を強化するという「公共圏の再封建化」につながってしまうことへの注意です。地域移行政策は、こうした再封建化に加担しているという注意も必要であるとは私は思っています。

最後となりますが、北海道の「浦賀べてるの家」の「研究する」という行為に着目したいと思います。精神疾患を患う人々が、共同生活をするのが「べてるの家」です。ここでは、自分を知るためのゲームとして「研究する」という行為があると言われています。この行為は「当事者研究」の意義を考える重要な事例として紹介されています。精神疾患を患う内部者自身の「自己語り」を自ら自己分析し、これを「研究する」過程では同居する仲間たちと語りあうことを成立させます。そして、一人ひとりの精神疾患を「べてるの家」の共同課題として位置付けます。決して、個人の課題で終わらせることをしないのです。こうすることで、「べてるの家」では共同生活の上で、なかなか言葉にできず、他者に伝えられないジレンマを克服するための「研究する」という行為が成立します。クラブにおける公共圏とは、スポーツの公的課題を「研究する」という共同行為があらわれる社会空間として、私は考えてみたいと思っています。

私の話は地域移行の実践そのものにダイレクトに響くようなものではなかったと自覚していますが、クラブの本質論を考えることは、日本スポーツの数々の課題に向き合うことであり、近未来のスポーツ社会を構想するために、地域移行をめぐってこうしたことを考えておく重要な機会であると思います。また、杉本先生が中心になって活動されている「子ども未来・スポーツ社会文化研究所」や宮嶋さんの「カルティベータ」というアソシエーションは、まさにスポーツの公論、スポーツの公共圏をつくりだす社会運動であると思います。

以上となります。ご清聴ありがとうございました。

コメンテーター：宮嶋泰子氏（会員・一般社団法人カルティベータ代表理事）

私は10月4日から10日までドイツに行ってきました。体操競技のマスターズがドイツで初めて4カ国のチーム・ワールドカップがあったので、その取材でした。ドイツ国内のクラブ対抗というのが、そのワールドカップの翌日から2日間にわたって行われておりました。30歳から、80歳のご高齢の方まで、全ドイツのクラブで体操している方たちが集まって、非常に充実した時間を過ごしておられました。

現代の体操競技はドイツのフリードリッヒ・ヤーンが1811年に作ったトゥルネンというものを原型としていると言われています。トゥルネン体操はトゥルンフェラインという組

織を作って活動していました。これが今のスポーツクラブの基礎になっているという考え方をいただければいいのかと思います。このトゥルンフェラインでは、政治討論も活発に行われていたようです。その中では逮捕される人たちも出てきたという話も伺いました。ヤーンは最初、ナポレオンに凌駕されてしまったドイツで、なんとかドイツの人たちにもっと体力をつけてほしいと思って、体操教育を作ったそうなのですが、そうやってトゥルネンという組織体をつくっていくうちに、何か自分たちが伝えるべきこと、そして社会的にムーブメントを起こしていくことの必要性というのを強く感じたのだらうと思います。ですから、水上先生がおっしゃった公共圏とか社会運動というようなものが、1811年にヤーンが体操を作って、トゥルネンというものを作った時からあったことなのだなというのを私は強く感じました。

今回、クラブの対抗戦と、日本も参加した4か国の国際大会を見て驚いたのですが、日本で体操競技というと男子は6種目、女子は4種目で決まった器具しか使わないのだけれど、ドイツには決まった器具以外があるのです。例えば私が今、60歳の年で、さあ、この平均台に乗って何かやりましょうといっても、平均台はわずか10cmの幅ですから、この10cmの幅の上を歩くだけでも大変になってしまいます。パッと横を見ると、ドイツにはベンチのようなものがあって、そのベンチの幅はだいたい30cmぐらいでしょうか。そのベンチの上で、平均台で行うような演技をしても構わない、その代わり得点は2点減ることになります。平均台は落下するとマイナス1点です。幅20センチの高い平均台で2度落下するより、30センチの幅のベンチ型で安心して体操ができるの方がよいと思う人は少なくありません。ですから年配の方だけでなく、40代の方も非常にアグレッシブで積極的な演技をベンチ型の平均台で行っていらっしゃいました。その人の年齢や、運動能力にあった選択ができるということです。自分の志向に合わせて器具を選ぶことができるということです。これは平均台だけではなくて、平行棒は高さ1mほど、鉄棒も高さ1m50cmほどのものが用意されていました。

ドイツのスポーツの考え方が、全てが一律ではなく、その人の志向と好みに合ったものを選べるような選択肢があるのだなということを強く感じました。あらゆる人がいろいろなことを自分のニーズに合わせて行うことができる。この基本は大切だと感じます。

フェラインと呼ばれるクラブの中で、体操だけでもこうした選択肢があるということは、様々な人がいて、みんなが同じ方向を向いているというわけではないということなのでしょう。日本のスポーツは、みんな丸刈りというニュースなど、みんな同じことを一斉にやるのがスポーツと言われ、スポーツの歴史の中にもあったわけです。1900年から45年までの日本が戦争に突入していった時代に、学校の運動部活動や学校体育というのが軍事訓練というようなものになっていったわけですが、当時の体育の先生というのは軍人から採用されていました。他の教科とは違ったわけです。そうした名残りが現在でも学校部活動などにあるのではないかと、ハラスメントの話を聞くたびに思っています。

これはオランダの話なのですが、オランダの屋内スケートリンクが古くなって、小

さい子どもたちがやるにはいいけれど、中学生、高校生になるとコーナリングがきつくて危なくなるので、建て替えた方がいいねという話を持ち上がりました。こういった公共施設を建て替えるときには、どこの国でも議会で議論され、そして承認されると建て替えるということになるわけですが、オランダの私の知り合いは、その議会にクラブの小学生たちを連れて行きました。そこで、子どもたちは自分たちが毎日滑っているリンクが、これから建て替えられるというそのプロセスの一部を実際に見るわけです。非常に重要なことだと思うのです。なぜかという、ドイツではスポーツクラブ、フェラインに入るということは、最初に子どもたちが民主主義を学ぶ場であると言われているのですが、これが、まさに水上先生が今日おっしゃった公共圏と社会運動を学ぶ基礎になるということなのだろうと思っています。それが、オランダでは、スケートリンクを建て替えるという時に、クラブで子どもを議会に連れて行くということにつながるのだと思います。

日本でこういうことが起きた時にどうでしょう。スポーツというのは、先ほど申し上げた軍隊の残滓のようなもので、みんな、同じ方向を向いているのがスポーツだって、まだ勘違いしている方がいらっしゃるの、公共圏や社会運動からは一番遠いものであるというふうに感じていらっしゃる方が少なくないのではないかと。そういうふうに私は感じます。ですから、水上先生が最初におっしゃった、これは理想ですから一つずつゆっくりゆっくり歩を進めて、クリアして目的に向かっていくということになります。まさにその目標を掲げる、そこに行くのだという目標を掲げるお話を今日してくださったのではないかと思います。

水上先生に一つお伺いしたいのは、公共圏と社会運動と言った時に、日本ではこれを政治的というような言葉で表現してしまって、クラブで政治的な活動するのはあり得ないんじゃないのと、ちょっと忌み嫌われてしまうような気がするのですが、実際に、具体的にドイツで何かやっているような例がございますでしょうか。

ナビゲーター：水上博司氏（会員・日本大学文理学部体育学科教授）

私は、日本体育・スポーツ・健康学会の体育スポーツ政策専門領域の研究促進委員会の委員をしているのですが、その委員会で次のような話題が出て、盛り上がりましたので紹介します。

ドイツのブンデスリーガのクラブが投資家から投資の対象になってしまう。そうならないようにクラブの自治をドイツの市民の側にしっかりと向けてほしいという提言を、ブンデスリーガ、サッカー協会に出して、それをインターネット上で公開しています。実は、クラブの代表者らと行政の関係者らが共同でこういう提言をしたということです。これを研究促進委員会のみんなで共有をしたのですけれども、いわば、行政もそういうクラブからの提案を、優先順位の高い位置に位置づけて受け入れるという体制を整えているということと、よくよく聞くと、行政の側に元クラブの職員の方や、そういう接点の方がちゃんと専任スタッフとしているということです。つまり、クラブが行政の職員の供給元にもなってい

るということをおっしゃっていました。ですので、行政とはいえ、クラブのカルチャーと言いますか、それについて非常に理解されている方々がスタッフとしてちゃんと入っている。そういう提言を出していくスタッフのルーツをたどっていくと、元クラブの出身者だったりとか、クラブで高いレベルのアスリートであったり、そういう人たちのキャリアを形成する場として行政の職員をちゃんと育てているというのがクラブでもあるのだなと感じました。

そういう提言書が行政や協会に対して、政治的に抵抗的というイメージではなくて、一緒に何か作っているというイメージを持っていた方がよろしいのではないかなと思います。

コメンテーター：宮嶋泰子氏（会員・一般社団法人カルティベータ代表理事）

よくわかりました。そもそも日本人が社会的な公共圏や社会運動というものにどれだけ興味を持っているかということがあります。持っているのであれば、こんなに選挙の投票率が低いわけではないだろうと思ったりもします。それとも絡んでくるのですが、今回のこの中学校の運動部活動の地域移行、地域連携に関して、いろいろな方にお話を伺った中で、ああいいなと思った考え方がありました。日本も18歳で成人になると変わったので、中学校3年生はおおむね15歳ですから、成人まであと3年です。15歳という年齢で、自分なりの考え方を身に付けジャッジメントしていくことや、社会的な判断をするための基礎作りを、スポーツを通じて身につけていくことが必要なんじゃないかというお話をしてくださった元校長がいらっしゃいましたが、私はその通りだなと思っています。それがドイツで言うところの、子どもがクラブに入ることは民主主義を最初に学ぶことという意味と同じなのでしょう。この部活動の地域との連携で、子どもたちは大人と一緒に社会的なことも学んでいくというプロセスができるといいなあと私も思っております。

今まで部活動というと、時間厳守、挨拶などのルールの習得と、体力の強化などが中心に考えられていましたが、スポーツも、広い社会のフィールドの中で行われていることを忘れてはならないと思います。学校からスポーツが地域に移される時、公共圏と社会運動というポイントを忘れずに考えていけたらいいなと思っています。

<参考文献>

- 荒井貞光, 1977, 「Ⅲスポーツクラブの育成」, 平澤薫・糸野豊編『生涯スポーツ—幼児・児童・青年・成人・高齢者のための』, プレス ギムナスチカ: 246-261
- 荒井貞光, 2003, 『クラブ文化が人を育てる—学校・地域を再生するスポーツクラブ論』大修館書店
- 荒井貞光, 2020, 「「コートの外」より愛をこめ〔復刻〕—スポーツ空間の人間学」, 水上博司・谷口勇一・浜田雄介・迫俊道・荒井貞光編『スポーツクラブの社会学—「コートの外」より愛をこめの射程』青弓社: 121-260

- 有賀郁敏, 2019, 「ドイツにおける結社の歴史的意味—「社会的 (social)」なものに着目して」, 『日本スポーツ体育健康科学学術連合会第3回大会 シンポジウム2 発表資料』
- 綾部恒雄, 1969, 「米国のコミュニティーとクラブ組織—上パーキオメン・コミュニティーの事例」, 『民俗学研究』 34-3 : 217-251
- Erich, F., 1968, THE REVOLUTION OF HOPE: Toward a Humanized, Technology Harper & Row (作田啓一・佐野哲郎訳, 1969, 『希望の革命』 紀伊國屋書店 : 226)
- Habermas, J., 1990, Strukturwandel der Öffentlichkeit, Untersuchungen zu einer Kategorie der burgerlichen Gesellschaft. Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main (細谷貞雄・山田正行訳, 1994, 『〔第2版〕公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探究』 未来社)
- 広田照幸, 2001, 『教育言説の歴史社会学』 名古屋大学出版会
- J.League.News., 2003, Vol.93
- 菊幸一, 2000, 「地域スポーツクラブ論—「公共性」の脱構築に向けて」, 近藤英男ほか編 『新世紀スポーツ文化論 体育学論叢IV』 タイムス : 86-104
- 菊幸一, 2023, 「公共性の歴史社会的観点からみた民間スポーツ組織の統括性に関する日欧比較研究 (研究課題番号 18H03145)」, 『平成30年度～令和4年度科学研究費補助「基盤研究 (B)」 研究成果報告書』
- 日下裕弘, 1985, 「わが国におけるスポーツ組織の形成過程に関する研究(I)」, 『仙台大学紀要』 17 : 29-43
- 日下裕弘, 1988, 「わが国におけるスポーツ組織の形成過程に関する研究(II)」, 『仙台大学紀要』 20 : 1-17
- 増田靖弘, 1971, 「国民のスポーツプログラム7「スポーツ・クラブ」論」, 『体育科教育』 19-11 : 32-36
- McIntosh, P.C., 1963, Sport in Society (飯塚鉄雄ほか訳, 1970, 『スポーツと社会』 不味堂出版 : 77-78)
- 中澤篤史, 2014, 『運動部活動の戦後と現在』 青弓社
- 内閣府, 2013, 『我が国と諸外国の若者の意識に関する調査—13～29歳の若者』
- 難波功士, 2007, 『族の系譜学—ユース・サブカルチャーズの戦後史』 青弓社
- 西政仁, 2022, 「「部活動の地域移行」—今, 総合型地域 SC が地域に求められる理由 2022年度日本体育・スポーツ・健康学会体育社会学専門領域研究会資料」, 『年報体育社会学』 4 : 110-114
- 佐伯聰夫, 1987, 「スポーツ組織」, 日本体育協会監修・岸野雄三編集 『〔最新〕スポーツ大事典』 大修館書店 : 608-613
- 佐伯年詩雄, 2007, 「日本スポーツイノベーション—日本21世紀スポーツビジョンに向けて—OSF第1期ポリシーボード提言」, 『大崎企業スポーツ事業研究助成財団』 11-12

- 佐伯年詩雄, 2009, 「アドバイザーボードから見たスポーツ法創設の動きとその政治的背景」, 『スポーツ法学会年報』 16 : 176-185
- 坂上康博, 1986, 「日本近代におけるスポーツの受容と展開—明治期の校友会野球部を中心に」, 伊藤高弘ほか編『スポーツの自由と現代 (下)』 青木書店 : 417-418
- 佐藤暢子, 2019a, 「子どもの「運動格差」を生じさせるものは何か?」, 『ベネッセ教育総合研究所』
- 佐藤暢子, 2019b, 「めざすのは部活動と家庭学習の両立!—中学生の放課後活動」, 『ベネッセ教育総合研究所』
- 新堀通也, 1996, 『「見て見ぬふり」の研究: 現代教育の深層分析』 東信堂
- 城丸章夫, 1992, 「第 4 章 スポーツクラブ論」, 城丸章夫著『城丸章夫著作集 第 7 巻 体育・スポーツ論』 青木書店 : 275-416
- 鶴見俊輔, 1976, 「なぜサークルを研究するのか」, 思想の科学研究会編『共同研究 集団』 平凡社 : 3-21
- 財団法人日本体育協会, 1971, 『体協時報』 212

《第 30 回記念オープンセミナー》

サッカーとメディアの 100 年

～日本サッカー協会創立 100 年に寄せて～

黒田 勇(理事・関西大学名誉教授)

はじめに

あらゆるスポーツと同様に、日本サッカーもメディアによって育てられました。

2021 年日本サッカー協会創立百周年を経て、今年『百年史』も出版されて、その中で「サッカーとメディア」というコラムを書かせていただきました。今夜は、その中で、もう少し強調したかったサッカーとメディアの関わりを中心に振り返りたいと思います。

中心は 60 年代の話になります。サッカーに限らず「見るスポーツ」の大衆化はテレビの普及する 60 年代です。もう一つのキーワードは「プロ・アマ問題」です。100 年というタイトルですが、私の関心に合わせて、最初の半世紀となります。

1. 戦前のサッカー報道

草創期のメディアとサッカー

日本代表初の国際試合は、東京芝浦の仮設運動場で開催された第 3 回極東競技大会です。今日はこの極東大会とは何かという話は触れません。1917 年 5 月 9 日に対中国戦が 0-5、翌日 10 日の対フィリピン戦が 2-15 という結果でした。現代では信じられないかもしれませんが、本格的に日本にサッカーが伝わって 20 年ほどの時代です。

もちろん、新聞の関心は極めて低く、図のような記事しか載りません。この時代、スポーツ記事を紹介すること自体がほとんどなく、その中では陸上競技の大会と野球、そして相撲に紙面が割かれる程度でした。



ちなみに、箕面電車（箕面有馬電気軌道／現、阪急電鉄）の郊外開発の一環として、豊中運動場が 1913(大正 2)年に開設され、1915 年に後の「甲子園野球」となる「全国中等学校優勝野球大会」が、この地で開催されています。また、サッカーに関しては 1918 年 1 月、「日本フットボール大会」（現、全国高等学校サッカー選手権大会）が大阪毎日新聞（現、毎日新聞）の主催で開催されています。この豊中球場は、しばらくは大阪のメディアスポーツのメッカとなりました。現在の高校野球をはじめ多くのスポーツが新聞と鉄道のおかげで発展のきっかけをつくっていることもおさえていくべきでしょう。東京では「羽田運動場」

が 1910 年に開設されていますが、学校同士の試合や競技が各学校のグラウンドから郊外の競技場(グラウンド)へ移動し、とりわけ関西の場合は、新聞と電鉄の連携によって、いくつかの学校やチームが集まる「大会」が可能になったということもできます。

ベルリンオリンピックの偉業

話は、少し跳びます。1936 年のベルリン大会で、日本代表は優勝候補とされたスウェーデンに勝利します。このことは現在のサッカー関係者の中では戦前の日本代表の「一大偉業」としてよく語られ、先の『百年史』でも、「ベルリンの奇跡」として誇らかに掲載されています。しかし、当時の新聞を見る限り、一般に注目を集めていません。大会前年の 1935 年の日本代表の派遣決定から、国内での強化試合、選手の横顔など時折紹介されています。

ところが、勝利した翌日の新聞では「蹴球も勝つ スウェーデンと対戦」(『朝日新聞』、1936 年 8 月 5 日、朝刊) とたった 4 行の記事しかありません。当時のベルリン五輪の現在に残る「記憶」においても、陸上競技と水泳、とりわけ「前畑頑張り」が独占しています。この大会は、日本の各紙も、そしてラジオも、大々的に報道したのですが、ベルリン五輪のサッカーの「奇跡」「偉業」は、現在のサッカー文化の発展のおかげで改めて掘り起こされた「記憶」と言えるかもしれません。



サッカー放送

ここで、当時のラジオ放送についても触れておきます。日本最初のラジオ中継は、1930 年 12 月 28 日の東西対抗学生蹴球リーグ決勝「東大対京大」(甲子園南運動場)でした。但し、大阪局(BK)のみの試験的な中継といえるものです。

1928 年の甲子園、1929 年の大相撲中継とあるのですが、馴染みのないサッカーという競技を音声のみで伝えるのは至難の業だったかもしれません。ちなみに、1924 年パリ五輪でサッカーの初放送があったと伝えられてはいますが、詳細は明らかではありません。また、1927 年に BBC はサッカーの初中継を行っています。しかし、馴染みのあるサッカーであっても、音声だけの実況中継はリスナーにとっては聞きづらいものだったようです。そこでひと工夫をして図のように、広報誌“The Radio

Times”で、ピッチを 8 つに区切って番号を付け、プレイする場所を伝えようとしたといひます。

2. 戦後のサッカー報道

第二次大戦終了後には次々にスポーツ新聞が誕生します。1946 年「日刊スポーツ」創刊を皮切りに、1948 年「デイリースポーツ」、1949 年「スポーツニッポン」、1955 年「サンケイスポーツ」と続きます、しかし、紙という物理的メディアに頼っていたこの時代、物資不足と「統制」もあり、一般紙については、現在のようにスポーツ情報に多くの紙面を割くことができませんでした。そのような中、1951 年 9 月「産経新聞」が「センカ紙」を使って増ページを図り、初のスポーツ頁を開始します。

とはいえ、戦後はとりわけ野球が中心となり、サッカーは依然として大きな注目を集めず、高校選手権から海外チームの招待まで、新聞社がサッカー大会を支える形はより強化されていきます。その内容の特徴は、一言でいえば、戦後の新聞記事は一貫して「啓蒙的」だったと言えます。

ここで、戦後の二つのサッカー国際試合を取り上げましょう。

まず、1951 年 11 月、戦後初の海外チームとしてスウェーデンの「ヘルシンボリ」が来日します。日本蹴球協会と朝日新聞社が招へいして、各地 6 試合が行われましたが、日本チームは 1 点もとれず、合計 0-36 と惨敗しました。朝日新聞の大谷四郎記者らが戦評を書くとともに、各試合で相手監督の日本チームの評価談話を掲載します。現在、世界最長老現役記者といわれる賀川浩は、これを機に「夕刊京都」にサッカー記事を書き、翌年産経新聞に入社することになります。

このときは、対戦チームが日本チームの評価者であり、指導的な立場に位置付け、サッカーの復興と成長を願う記事を掲載します。大谷記者の記事一例だけ紹介しましょう。

スウェーデン・サッカー リーバーク副団長記

もちろんわれわれは全試合に勝てて喜んでいる。また日本のサッカーが多くの長所をもっているのに賛辞を惜しまない。その一つは日本の選手が非常に優秀でがんこに闘うことである。ただこの闘志がガムシャラなタックルとなって現れているのは感心しない。この表現は余り強過ぎるかも知れないが、もちろん私としては彼らの強過ぎる



タックルにはなにも悪意があるとは思わない。しかし本当をいえばああいうタックルの 8 割はヨーロッパならばファウルでフリー・キックをとられるということを指摘しておきたい。正しいタックルは日本選手がもっと国際試合の経験を積み得られる。(朝日新聞東京本社朝刊 1951 年 12 月 5 日付)

FIFA ワールドカップスイス予選

1954 年、日本は初めてワールドカップ出場を目指します。この時は、アジアから日本だけがエントリーと思われたのですが、韓国もエントリーした結果、大変難しい戦いとなりました。しかし、メディアの注目は大きいものではありませんでした。当時の新聞を見ても、同時期に開催されていた大相撲やプロ野球オープン戦とほぼ同じスペースの報道で、大きな扱いではありませんでした。



その中で、記事の内容は、現在の熱狂的な応援記事ではなく、あくまでも啓蒙的なものだったと言えます。朝日新聞の中条一雄（入社一年目）の記事を例にしましょう。

「ばねの強さは聞きしに勝る」
 (『朝日新聞』1954 年 3 月 3 日)

第 2 戦展望では、「昔からよく言われていた力（韓国）と技（日本）の差という言葉の伸縮性のある力強い技と小器用な技の差という言葉に変えなければならない」(『朝日新聞』1954 年 3 月 13 日)としています。

元々勝てる相手ではないと考えていたから冷静な記事だったのかもしれませんが、あくまでも技術論

が支配した記事だと言えます。この予選の後のサッカー記事も、記者たちは戦評記事を書く機会が少ない中、機会を見つけては、競技能力の向上と発展のための激励と啓蒙的な記事を書いていました。例えば、賀川浩も、記事スペースは小さくとも高校サッカーを地道に取材していました。賀川に限らず、野球を中心とした他のスポーツ記事を書きつつ、サッカー取材の情熱を失わなかった記者たちは次の時代に花が開くことになります。

ところで、戦後のサッカー放送はどうでしょうか。1953 年テレビ放送開始の年の秋、11 月 22 日に大阪球場での「全日本対 DIF ユールゴールデン」戦がラジオは全国ネット、テレビ

は大阪、東京、名古屋の各局から放送されました。ラジオはともかく、テレビは全国で1000台程度の受像機でしたから、ごく少数の視聴者に向けたものでした。

翌1954年のワールドカップ予選第1戦もテレビとラジオで中継されました。先に述べたように、野球や相撲に比べ極めてマイナーなスポーツでしたが、海外勢と戦う「日本代表」は、放送メディアにとって初期段階から魅力的なコンテンツだったと言えるでしょう。



『日本サッカー協会 100 年史』(2023)より

1964 年東京オリンピックとその後

話を急ぎます。1964年の東京オリンピックは日本のスポーツを大きく変えましたが、もちろん、サッカーもその一つです。日本代表はグループリーグ1勝1敗でしたが、3-2で強豪アルゼンチンに勝利したことは、いくらアマチュアの大会であるとはいえ、サッカー界では大きなインパクトとなりました。新聞は、古い記憶を引っ張り出し、「ベルリンの奇跡」に例えました。(下図、「朝日新聞」1964年10月15日付)



オリンピックのサッカー報道は、柔道やバレーボールといった日本の期待種目からすれば脇役ではありましたが、アルゼンチン戦の勝利もあり、それなりの報道量と質で行われ、大会後にそのインパクトは継続することになりました。

ご存知のようにこの大会のレガシーとして「するスポーツ」の普及が挙げられます。「ママさんバレー」や「スポーツ少年団」などが有名でしょうが、サッカー界にとっては、クラマーコーチの「置き土産」ともいえる「JSL 日本サッカーリーグ」の組織が次の時代へと繋ぐレガシーといえるものでした。

日本サッカーリーグ発足とテレビ

1965年「日本サッカーリーグ(JSL)」の発足によって「サッカーブーム」という言葉がメディアに踊るようになりました。そしてメディアでのサッカーの扱いは大きく変わりました。

した。この時代、新聞の発行部数約 3,000 万部、テレビの世帯普及率 90%と、まさにマス・メディアの時代となっていました。JSL の発足は、テレビにも新たな「スポーツコンテンツ」を提供することとなりました。「コンテンツ」という言葉はビジネス、商品を連想させますが、この時代、直接にビジネスとなったわけではありません。日本リーグの試合は、日曜午後、NHK 教育テレビを中心に、頻繁に中継放送されました。

テレビによって、釜本邦茂や杉山隆一、宮本輝紀、小城得達らがお茶の間で知名度を得ました。サッカー関係者以外の人々がサッカー選手の名前を覚えるのはこれが初めてだったでしょう。テレビで見たプレイヤーたちを見にスタジアムに出掛け、詳細を活字メディアに求めるという循環が生まれました。

『サッカーマガジン』の創刊

『月刊サッカーマガジン』は、JSL 人気に呼応し、サッカー情報や知識を提供するものとして歓迎されました。高校や大学のサッカーの記事に加え、JSL の情報と、世界のサッカー情報を掲載しました。



サッカー専門雑誌の登場は、サッカーを議論する「情報空間」の誕生でもありました。雑誌メディアを核とし、サッカー文化が育つ土壌が生まれたとも言えます。そして、その前の時代に苦労しながらサッカーを取材し、細々と記事を書いてきたサッカー記者たちが、「水を得た魚」のように活躍を始めます。

賀川浩をはじめ、岩谷俊夫(48 年毎日入社)、牛木素吉郎(56 年東京)、大谷四郎(48 年朝日)、荒井義行(65 年毎日)、中条一雄(53 年朝日)らがこの情報空間の中心にいました。彼らの提供する試合の解説、世界のサッカー事情は、「乾いた土に水が染み込む」ように、情報に飢えていたファンに歓迎され、テレビ中継の増加と相まって新たなファンを開拓していきます。

3. 1966 年のスターリング・アルビオンの来日

初のプロチーム来日

1966 年 6 月「プロ」チームの初来日は「サッカーブーム」に拍車をかけました。新聞は試合前から紹介記事を書き、日本人の多くが、初めて世界のサッカー事情を知ることになります。

実は、日本蹴球協会は、イングランド 1 部のシェフィールド・ウェンズデーを招へいたのですが、彼らは 5 月下旬の FA カップ決勝まで進み、敗れたもののカナリア諸島への

ご褒美旅行を優先し来日をキャンセルしたので、スコットランド1部のスターリング・アルビオンに白羽の矢がたちました。

1966年6月の日本はどのようなものだったのか、簡単に紹介すると、加山雄三主演『アルプスの若大将』がヒットし、その主題曲「君といつまでも」も大ヒット、芸能界は加山雄三の年で、彼に象徴される高度成長を謳歌する時代でした。また、ビートルズが来日して武道館で公演したのが6月末でした。日本リーグの東西対抗戦、いわゆるオー



スターリング・アルビオン FC 所蔵資料

ルスターゲームが初めて開催されました。翌7月には、W杯イングランド大会が開催されますが、スターリングFCの滞在中にもW杯の記事はまったく掲載なく、翌7月のW杯開催中も、W杯の記事は極めて小さいもので、「サッカーブーム」という言葉が新聞に踊る割には、日本はまだW杯は遠いかなたのイベントでした。

さて、1966年6月22日、国立競技場に約4万5,000人の観客を集め、若手中心の「日本選抜」第1戦は、アルビオンの快勝でした。

「アルビオンが快勝 ワザで日本選抜を圧倒」(『読売新聞』1966年6月23日)、同日の『朝日新聞』にも「プロらしい厳しさ」「得意の速攻光るアルビオン 日本選抜後半の反撃及ばず」「アルビオンは巧妙というよりも堅実な力強いサッカーだ」といった記事が並びます。



「朝日新聞」1966年6月27日

第2戦は、駒沢競技場で日本代表との試合でした。この試合は26日夕刻に『ビッグスポーツ』(NET テレビ[現テレビ朝日])の時間枠を拡大して生中継されました。

当日の朝刊には、「メキシコ用の新戦に期待 今日アルビオン戦」「(日本)アマチュアがプロを破る金星は、必ずしも不可能ではない」「長いリーチと出足の早さで、日本より一枚上だ」(読売新聞)などと、善戦を期待する記事が掲載されましたが、結果は惨敗とは言えないものの敗戦でした。「日本代表も敗れる アルビオン、後半に猛攻」の見出しの下、「苦しい条件の中だけにたたきこまれた基礎技術の差がはっきり出た」「相手はグラウンド全体に心を働かせ、十一人が結びついたプレーをする」「スキを素早く見逃さなかったアルビオ

ンはさすがに経験を積んでいるといえよう」（『読売新聞』1966年6月27日）など書きました。

また、朝日新聞も、「熱戦 力尽きた全日本 再度の同点及ばず」との見出しで、「同競技場 収容人員いっぱい約二万人のファンがつめかけ..スキを素早く見逃さなかったアルビオンはさすがに経験を積んでいるといえよう...これでヨーロッパの一流チームを射程圏にとらえたといえることができる」（『朝日新聞』1966年6月27日）と同様の内容で書いています。

このように、『サッカーブーム』の中、大観衆の下で初のプロを迎え撃った日本サッカーの評価ですが、やはり、アマチュアの日本に対するプロチームの強さが強調されています。

アマ・プロ問題

実は、アマとプロの対戦が当時の体協に認められたのは、この試合の1か月前だったのです。以下は、1か月前5月25日の記事です。

日本体協のアマチュア委員会（前田豊委員長）は24日正午から東京・代々木の岸記念体育館で開かれ、日本蹴球協会が計画している英国プロ・サッカーチームとの交流試合を認めることを決めた。同協会が英国のスコットランド一部リーグのスターリング・アルビオンチームを来月下旬か7月上旬に招き、東京・駒沢、国立両競技場で日本リーグ選抜チーム、全日本選抜チームと二試合をおこなって技術の向上をはかろうと計画したもの。プロとの対戦はアマチュア資格にふれるのではないかという一部体協関係者の発言があったため、その結論が注目されていた。

この会議では①国際サッカー競技連盟（FIFA）がプロとアマとの交流試合を禁じておらず、国内的には体協アマ規程付属書、4項のアマ規定4の1によって認められる。②プロとの交流試合を行うことによって日本サッカー界の技術向上に役立つという点を重視したものである。

この問題について先に体協側からアマチュア委員会が取扱いを一任されていたもので、この日のアマチュア委員会の結論が自動的に日本体協の決定となる。

なおゴルフ競技はこれまでプロとアマ選手がいっしょに競技会を行なっていたが、今後アマがこういった競技会に参加する場合はアマチュア委員会に競技会参加の申請手続きが必要となった。」（朝日新聞東京本社朝刊 1966年5月25日付）

スポーツのアマ規定を少し復習すると、すでに、1909(明42)年阪神マラソンでも「職業人」は遠慮してほしいと社告がでています。この頃は「人力車夫」などの職業人が余暇として長距離走をする学生たちよりもはるかに優れた走力をもっていたのです。

ただ、賞金は提供されているので、現在の「アマ・プロ」論争とは全く異なるものでした。1920年代、長距離走において「車夫」「郵便配達人」などの排除があり、最終的に1924年

パリオリンピック前の議論で、オリンピック憲章にあるようなアマチュア規定が日本でも適用されるようになっていきました。日本におけるアマチュアの神聖化はオリンピック憲章と野球から進んだとも言えます。

さて、来日 1 カ月前に日本体育協会のアマチュア委員会が、「日本蹴球協会が計画している英国プロ・サッカーチームとの交流試合を認める」と決定、全スポーツ競技の中で初めてプロとアマの試合を認めたのはまさに画期的なことでしたが、来日後も「アマ・プロ論争」はくすぶっていました。

そこで、多くのサッカー記者はプロ擁護の立場から論陣を張り、「プロ」チームのプレイぶりを好意的に書きます。読売新聞の牛木素吉郎はその急先鋒でした。戦評として、スターリングを「気持ちの良いチーム」

とし、「体格のよい守備軍のからだの寄せは、激しいが、肩からはいるフェアなチャージだ。それに足が早く、ゆるみがない。攻撃も短いパスを中盤ですばやくつなぎ、スキをみて長い縦パスをゴール前に送る。日本のすきは見のがさず鋭くつき、スピードがあった」（『読売新聞』、1966 年 6 月 23 日）等と、プロ擁護の先陣を切り、帰国翌日にも「プロ」の価値についての記事を書きました。

「この試合を見た六万人余の観衆の中に『日本のサッカーがプロと対戦したので汚された』と思った人が、ひとりでもいただろうか」「アルビオンの試合態度のよさは、これまでにきたどの外国チームよりもすがすがしかった」。

また、帰国後の総括的文章でも、「アルビオンは技術とマナーの模範を示すことによって、日本のアマチュアに奉仕した。サッカーについては、プロだろうとアマだろうと、日本では日本サッカー協会が主催する。だから、協会がしっかりしてさえすれば障害の起こる余地はない」（『読売新聞』、1966 年 7 月 1 日）と、改めて、サッカー界にアマとプロの区別の必要がないことを説いています。

また、当時の著名なスポーツ評論家川本信正も「さらば『シャマチュアリズム』」という記事を『アサヒグラフ』に掲載します。

最初にこの話が、アマチュア・スポーツの本山、日本体育協会の理事会で出たとき、出席者の大半が当惑げに顔を見合わせた。陸上でも水泳でも、アマとプロの試合は国際ルールで“禁じられた遊び”である。とくに IOC（国際オリンピック委員会）がアマとプロの混同には極度に神経をとがらせている。だから体協の理事会は、サッカーが突如としてプロとの試合を発表したことが、どうも釈然としなかったのだ。サッカーの国際連盟は「アマチュアを振興し、プロを統制する」ことを目的にアマとプロの両方を支配し、その交流も



『月刊サッカーマガジン』1966 年 8 月号

認めている。だからサッカーに関するかぎり、アマチュアはなんの気がねもなくプロとも試合ができる。

いま体協には、全部で 26 項目の細かいアマチュア規則がある。昭和 32 年の苦心の作がそのままだが、それから 10 年近いあいだに、スポーツ水準の急激な向上、プロ・スポーツの隆盛、それらを伝達するマスコミの発達、レジャーの増大に伴うスポーツの大衆化など、当時予期しなかったいろんな条件が重なり合って、規則が現実をカバーしきれなくなった。スポーツで生活しているのがプロ、そうでないのがアマ、と常識的に割りきったうえで、すっきりした“大衆アマチュアリズム”への方向をさぐりだす手がかりになれば、プロ・サッカーの来日は、二重の意味で大歓迎だ。

さらに、岡野俊一郎もまた、サッカー協会の立場から、プロとアマの区別の無意味さを主張しました。

「多くの観客がスタンドを埋めることは、選手にもよい刺激となるし、また初めてサッカーを見た人の中から、将来多くの優秀な選手も生まれてくるだろう。とにかく、数年前まで“サッカー”という競技がどんなものかすら知らなかった人が『サッカー大分盛んになって来たらいい』と知ることが普及の第一歩でもある。最近では週刊誌にも多くとりあげられ、漫画の世界にまでサッカーが登場している。(中略) サッカーをもっと根強く浸透させるために、着実な努力をすることである。より多くの人々がサッカーができる環境を作り出し、より優秀な選手、チームが数多く生まれるように指導を行ない、より多くの人々が試合を見て楽しめるような努力をすることである。そうすれば“サッカー・ブーム”が終わっても、サッカーは依然として日本のスポーツ界に大きな地位を占めることが可能になる」(『月刊サッカーマガジン』1966 年 8 月号)

以上のように、このスターリング・アルビオンの来日を契機として、メディアは「プロ」こそスポーツの模範なのだとの議論を展開しました。その中心にいたのは、牛木をはじめ、サッカーを通して世界を知っていた記者たちであり、彼らは日本社会の奇妙な「アマチュア礼賛」に不信感を持っていました。もしかすると、それは高校野球を中心とした野球の「プロ・アマ分断」を常識としてきた日本のスポーツ界に辟易としていたからかもしれません。

1966 年 6 月のスターリング・アルビオン来日とその報道は、サッカー関係者とメディアが一体となつての、日本サッカーが世界へ飛び立つためのキャンペーンであつたようにも見えます。

4. 海外サッカーとの接触

TV 番組『ダイヤモンドサッカー』の影響

1968 年、開局間もない東京 12 チャンネル(現、テレビ東京)で放送が開始された『ダイヤモンドサッカー』は「世界への窓」となりました。当初は BBC 制作のイングランドリ

ーグの試合を2週に分けて放送、その後、ブンデスリーガやメキシコW杯の録画放送などを紹介しました。この番組で初めて世界のサッカーを日常的に見ることができるようになりました。

金子勝彦アナウンサーと岡野俊一郎の対談にも似た実況放送が、サッカーをおしゃれでモダンな、教養あるスポーツとして視聴者に認識させました。

サッカーファンは、「サッカーマガジン」で仕入れていた海外のサッカー情報を映像として目の当たりにし、ますますサッカーが世界のスポーツであることを認識していきました。ただ、現在でもこの番組が日本のサッカー文化に果たした意義がよく語られますが、メディアの立場から言えば、東京12チャンネルは全国ネットを持っておらず、関東地区と、番組購入をしていたサンテレビ、KBS京都などの関西圏の都市部に限定されていたことも忘れてはならないでしょう。

メディアとしてのスポーツ商品

本日のテーマからすると少しずれるのかもしれませんが、より広いメディア概念でとらえると、ドイツのスポーツメーカーのシューズやシャツ、鞆などもサッカー文化にとって重要な「メディア」となりました。70年代になるとブラジルや日本のメーカーもその宣伝に努めるようになります。これも他のスポーツにはなく、またそれ以前には考えられないことでした。サッカープレイヤーやサッカーファンたちは、自らのアイデンティティを表現するファッションとして鞆やTシャツ、そして靴を履くようになりました。

1960年代後半から1970年代にかけてサッカーファンは、そうした商品もメディアとして「世界のサッカー」に巻き込まれていったと言えます。

まとめ

あらゆるスポーツはメディアとともに発展してきたことは言うまでもありません。日本の場合、相撲や野球はその典型です。とりわけ、テレビ放送はそのスペクタクル性に拍車をかけました。

一方で、サッカーの報道は、60年代まで、大変「啓蒙的」でした。メディアとサッカーの関係は、60年代までビジネスとは関係がなかったからなのかもしれません。記者やサッカー関係者たちの情熱がサッカー報道を支えてきたとも言えます。そして、1960年代半ば、東京オリンピックの後のサッカーブームの中で、彼らの押さえてきた情熱が花開きます。

スターリング・アルビオンの報道はその象徴的な出来事だったと思います。この時のプロ・アマ問題を、メディア関係者とサッカー関係者が一緒になって克服し、世界への飛躍のきっかけを作りました。日本サッカーはここから世界へ離陸していったと私は評価しています。

メディアとサッカーの100年と題しましたが、その前半部分だけで本日の話は終わります。

＜コメンテーター：北川信行氏（会員・サンケイスポーツ編集委員）＞

発表者の黒田先生が指摘された通り、サッカーも他競技と同じように、草創期はメディアに育てられて日本に根付いていったのは間違いありません。例えば、産経新聞、サンケイスポーツの大先輩である賀川浩さんを新聞の世界に招き入れたのは、木村象雷さんという人物です。彼は1928年アムステルダム五輪の競泳選手でした。木村さんは、ボールゲームの記事を書ける記者を探していたそうです。その中で、白羽の矢が立ったのが、賀川さんでした。

草創期のサッカー記者が情熱を持って啓蒙的な記事を執筆し、競技の発展に尽くしていたとの黒田先生の指摘に付け加えるとすれば、当時の記者たちは、産経新聞や朝日新聞、毎日新聞といった会社の垣根を越えてつながっていた点が挙げられると思います。なぜ、垣根を越えられたのかといえ、同じ学校の先輩後輩だったからです。

たとえば、産経の賀川浩さんと朝日の大谷四郎さん、毎日の岩谷俊夫さんはいずれも神戸一中（現・神戸高校）出身です。賀川さんと岩谷さんは1学年違いで、一緒にボールを蹴っていた仲でした。学閥という語弊がありますが、こうした点も、当時の記者たちが、目先のことに捉われずに、仲間同士で情報を共有し、日本のサッカーをどう発展させていくかを考えられた要因であるように思います。

不世出のストライカーである釜本邦茂さんが京都・山城高校1年生のときです。賀川さんは岩谷さんから「すごい選手がいるので、ぜひ、一度見てほしい」と頼まれ、初めて釜本さんのプレイを目の当たりにしました。そこから、どうやって釜本少年を将来、日の丸を背負って立つ選手に育てて行くかという話になったのだそうです。こうした記者が選手を育てていく視点は、今では考えられません。

また、賀川さんは日本サッカーリーグの強豪で、Jリーグ、セレッソ大阪の前身であるヤンマーディーゼルサッカー部の尼崎寮に日々赴き、監督や選手とサッカー談義を交わしていたそうです。監督や選手との距離の近さも、今とはまったく異なります。

日本サッカーリーグ発足、1968年メキシコ五輪での銅メダル獲得により、日本はにわかにサッカーブームが巻き起こりました。その後のJリーグへとつながる道を考えると、情熱を持ち、専門性も高かった当時のサッカー記者が、ワールドカップ（W杯）の現場に出かけるようになり、さらに世界との差を実感して、日本に還元しようという動きが70年代以降、起こったように思います。賀川浩さんが初めてW杯に赴いたのが1974年の西ドイツ大会でした。今ほど海外の情報が簡単には手に入らなかった時代、情熱を持った記者は世界のサッカー事情を自ら咀嚼して日本に伝える伝道師の役目も果たしていたように思います。

ダイヤモンドサッカーの画像と、専門的な記者の考察が相まって、日本に浮薄ではないサッカー文化を根付かせようとしたように思います。

子ども未来・スポーツ社会文化研究所季刊誌第 10 号（2023 年冬号）

発行日 2024 年 1 月 29 日

編集・発行者：子ども未来・スポーツ社会文化研究所代表理事 杉本厚夫

編集委員：速水 徹、西山哲郎、谷口輝世子、三角さやか（幹事）

一般社団法人 子ども未来・スポーツ社会文化研究所

Research Institute for the Future of Children and Sport Social Culture

<https://fcssc2020.jp> E-mail: info@fcssc2020.jp

